# ソ連占領期東ドイツにおける社会主義統一党の成立と変容（2・完）
## －独裁と社会主義の前提－

近　藤　潤　三

はじめに
1. 占領地区への分割－ソ連占領地区（SBZ）の成立
2. 社共両党の設立
（1）ソ連軍政部（SMAD）と命令第2号
（2）ドイツ共産党（KPD）の設立
（3）社会民主党（SPD）の設立
3. 合同を巡る社共両党の角逐（1）－社会民主党の積極的姿勢
（1）アンティファ・ブロックの形成
（2）社会民主党の組織統一提起と共産党による拒絶
4. 合同を巡る社共両党の角逐（2）－共産党の攻勢
（1）社会民主党と共産党の離間
（2）ヴェニヒゼン会議と共産党の攻勢・・・（以上前号）
（3）社会民主党の譲歩と60人会議
5. 社共合同の決定と社会主義統一党の創設
（1）60人会議から社会主義統一党創設へ
（2）社会主義統一党の創設－綱領的文書と組織
6. 社会主義統一党の変容－共産党系による制圧へ
（1）創設当初の社会主義統一党
（2）社会主義統一党の変容
結び

## 4．合同を巡る社共両党の角逐（2）－共産党の攻勢

（3）社会民主党の譲歩と 60 人会議

党勢の拡大を背景とする社会民主党の共産党からの離反は，上記のような攻勢を受けて挫かれ，短い幕間劇に終わることになる。それにはヴェニヒゼン会議で全国的な党建設が見送られ，グローテヴォールの社会民主党がソ連占領地区に活動領域を限定された影響が大きい。彼らは自党の優勢だけでなく，社会民主党本来の全国性を拠り所にして，ソ連占領地区だけでの共産党との合同は社会民主党の分断をもたらし，ひいてはドイツの分裂につながることを理由にして共産党の合同要求に対抗した。けれども，会議の結果，その土台が掘り崩されたのである。こうして，なおしばらくは SMAD の圧迫やキャンペーンによる共産党の攻勢を切り抜けられたものの，西側から突き放された社会民主党が守勢に立たされ，次第に敗色が濃厚になるのは避けられなかった。この点につき，「1945 年 11 月に明らかに社会民主党の自立性の頂点が達せられた」（Vorstand der SPD 8）として，その後に自立性が褪色したという見方も成り立ちうる。しかし，その場合でも，社会民主党だけではなく，12 月にはキリスト教民主同盟党首のヘルメスと副党首のシュライバーが SMAD によって解任された事件がみせつけたように，SMAD が君臨するソ連占領地区で SMAD や共産党の統制から離れて政党が自立化することは，元来不可能だったことを忘れてはならない。

労働者階級の統一を旗印にして共産党が社共の組織的統一に方向転換し，SMAD とともに圧力を強める中で，社会民主党は譲歩を重ねるようになった。11 月末に共産党が両党指導部の合同会議の開催を提案してきた時，即座に拒否回答しなかったのはその表れだった。同党中央委員会は対応を協議するため，12 月初めに中央委員会と州と地区の代表者が一堂に会する会議を開いたが，その場では改めて社会民主党の全国的立場を前面に押し出す論理で切り抜けることが決定された。その要点は，全国性に実質を与え

るために西側占領地区の党組織との結合を強め，定期会合を設けることにあった（Vorstand der SPD 8）。けれども，その可能性を打診するために派遣されたグニフケがシューマッハーから得た答えは否であり，ヴェニヒゼン会議と同様に，ソ連占領地区の社会民主党の西側からの孤立が浮き彫りになっただけだった。

そのような結果になった一因は，労働者階級の統一という大義に引きずられて共産党との関係を曖昧にする中央委員会の優柔不断にあった。しかし同時に，それがSMAD支配下における政党の限界だったことも否定できない。西側のシューマッハーと違い，大義を重視して共産党との協力を原則的に否定しないグローテヴォールたちは，不可能な自立と容認できない屈伏の間で動くほかなく，両極に分裂するジレンマに呻吟しなければならなかった。これに対し，反共主義と愛国主義の化身ともいえるシューマッハーの場合には労働者階級の統一よりも反共主義が優越していたのに加え，西側に身を置いていたためにそうしたジレンマとは無縁だった。そればかりか，ソ連について幻想を持たない彼は，SMAD支配下の限界を直感的に察知しており，共産党による統制から逃れられない中央委員会を冷たく突き放した理由もそこにあったと忖度される。

他方，地域組織に対するSMADと共産党の働きかけの効果も一部で顕在化した。それがどこまで圧力によるかは定かでないが，共産党との統一を決議する地域組織が出現するとともに，「しばしばソ連の地区指揮官の指示によって地域レベルで合同のための行動委員会が組織された」のである（Weber（2）32）。例えばメクレンブルクのトルゲロウでは12月24日に社共両党の党員の合同集会が開かれ，次のように決議された。「労働者階級とドイツ再建の利益に照らし，両党の合同は切迫した必要である。それによってのみ1918年の誤りは回避できるという点で両党は一致している。二つの労働者政党の合同に反するあらゆる措置は・・・ドイツ国民に対する犯罪である」（Dok.11）。仮にこうした動きが地方レベルで広がるなら，政党と

しての結束が失われ，社会民主党が切り崩されて窮地に立たされるのは自明であろう。共産党との合同会議への対応に苦慮した社会民主党中央委員会は，ジレンマに配慮しない西からの拒絶と SMAD の工作を受けた下からの揺さぶりという二重の困難に晒され，譲歩の幅を広げざるをえなくなるのである。

その一方で，この間に組織的統一を求める共産党の要求を強硬にする出来事が発生したのも見逃せない。ハンガリーとオーストリアで相次いで行われた選挙がそれである。連合国は各占領地区で選挙を実施することを取り決めていたので，両国で先行した選挙の行方には重大な関心が注がれた。

1945 年 11 月 4 日にソ連占領下のハンガリーで総選挙が実施された。この国にはドイツ東部と共通する 3 つの面があった。第 1 は，ソ連が単独で占領したことである。第 2 は，イタリアにさえ存在した反ナチ武装抵抗運動が存在せず，共産党の再建もモスクワ亡命からの帰国組によって進められたことである。レオンハルトの回想によれば，共産党員の間で「ヒトラーによって占領された国では多かれ少なかれ強力な抵抗運動が積極的な闘争を行ったが，ドイツではそれがなかった」事実に繰り返し注意を喚起され（レオンハルト 261,263），それが一種の負い目になってスターリンへの忠誠を一層強めたが，ハンガリーも同様だった。第 3 は，人民民主主義の名目で共産党以外の政党が認められ，その提携に基づいて大土地所有を解体して貧農に分与する土地改革が東部ドイツに類似した形で実施されたことである（矢田 220）。これらの点から，ハンガリーで完全な自由選挙として行われた総選挙は東部ドイツの今後を占う意味で注目されたが，結果は予想外のものだった。得票率 57.5% で小農業者党が圧勝し，共産党のイムレ＝ナジ農相が大掛かりな土地改革を手掛けたにもかかわらず，同党は 17.4% の社会民主党にさえ劣る 17.0% の得票率に甘んじたのである。

このような結果が東部ドイツの共産党指導者に与えたショックは容易に推察できるが，その衝撃は続くオーストリアの選挙によって危機感にまで

先鋭化した。オーストリアはドイツと同じく4カ国に分割占領され，首都ウィーンもベルリンのように4分割されたが，10月には全占領国の承認を得て単一の中央政府が発足した点が決定的に違っていた。そのオーストリアで11月25日に国会選挙が行われた結果，旧来のキリスト教社会党を継承する人民党が85議席，社会民主党の後継の社会党が得票率44.6%で76議席を獲得したのに対し，共産党は大差をつけられて得票率5.4%，僅か4議席という惨敗に終わったのである（南塚318）。ドイツと類比すれば東西を合わせた選挙に相当するので，共産党の大勝は期待できなかったものの，予想を遙かに下回る結果が深刻に受け止められたのは当然だった。この点に関しては，再びレオンハルトの回想が傾聴に値しよう。オーストリア共産党からは選挙直前に「多数票がとれるだろうと計算を立てた報告書が届いていた。オーストリアの選挙とその結果は，われわれ中央委員会の話題となった―『オーストリアの同志は，われわれの学ぶべき二つの決定的な誤りを犯している。最大の誤りは，社会民主党の過小評価である・・・』。この日から統一の大キャンペーンが始まった」（レオンハルト344）。

この一文から窺えるように，ハンガリーとオーストリアの事例は，戦争終結後の激動を背景にして共産党が躍進するという見通しが幻想でしかなく，ドイツでも自由選挙を実施したなら社会民主党が善戦し，共産党は重大な打撃を受けるに違いないことを予感させた。その意味で両国の選挙が東部ドイツにも大きく影響したのは確実といえよう。ただ念のために付言しておけば，レオンハルトの言葉を文字通りに受け取って，選挙を契機にして共産党が方針転換したかのように捉えるのは正しくない。例えばH. K. ルップは，「1945年秋のハンガリーおよびオーストリアにおける最初の選挙で共産党が意外にも手ひどい敗北を喫したためにソビエト占領権力は路線変更を決定し，突然ドイツ共産党に社会民主党との即時合同を宣伝させることになる」と述べている（ルップ68）。けれども，ここには二つの誤認がある。一つは，両国の選挙結果を重視するあまり，それが転換を画す

決定的な契機になったかのように見ていることである。しかし，事実は，共産党からの合同の働きかけが9月から現れていたのは上述したとおりであり，合同要求が強硬になったところに選挙の影響があったと考えるべきであろう。もう一つは，転換を決めたのが占領権力であるソ連とされていることである。こうした記述の根底には共産党を完全な傀儡と見て，一切の政策がソ連から発していたとする西ドイツで広く流布した見方がある。確かに重要な方針がソ連側の同意を必要とし，「東ドイツの共産主義者に対するおのれの指令権限になんの疑いも持たないソビエトの指導者」との関係が従属を基調にしていたのは否定できないとしても（ヴェントカー 84），そのことは共産党のイニシアティブが全く存在しえなかったことまで意味するわけではない。この問題については綿密な検討が必要だが，ルップのように路線変更が共産党に押し付けられたかのように描くのは，冷戦期に根強かった共産党観を反映しているだけに，その歪みをここで指摘しておかねばならない。この点を重視するのは，ソ連側の史料を精査したハリトノウが，「ドイツ共産主義者によるソ連占領地区の情勢判断はソ連共産党中央委員会の多くの決定で重要な役割を演じたし，ドイツ共産党の要望は通例，賛意と支持を得た」と記して（Haritonow 410），単純な傀儡説を否定しているからである。例えばM. レムケが自主性と独立性を区別した上で，後者は見出せなくても前者は認められるとしているのは，これと同様な見方といってよいであろう（Lemke（2）71f.）。

それはさておき，SMADの強力な支援があったにもかかわらず，共産党の主導によるドイツ再建は，上記のような情勢の推移の中で遠のいたように感じられた。共産党が統一行動から社共合同へと大きく舵を切り，社会民主党への圧力を日増しに強めたのは，主導権獲得の展望が薄れた危機感からだった。他方，社会民主党も共産党の要求に晒されて危機感を深めたものの，SMADの露骨な介入がある限り，それを撥ねつけるのは困難であり，譲歩を重ねることになった。こうしてSMADなどからの強圧とそれに対す

る抵抗が水面下で演じられた末に共産党の提唱する合同会議の開催を受け入れることが決まり，双方から 30 人ずつの代表が出席して開かれたのが，いわゆる 60 人会議である。

会議が開かれたのはベルリンで, 1945 年 12 月 20 日と 21 日の両日だった。会議の開催中に土地改革での有償収用を主張して SMAD と対立したキリスト教民主同盟党首ヘルメスと副党首シュライバーが SMAD によって解任されたというニュースが舞い込んだが，そうした事件は，政党へのあからさまな介入を辞さない SMAD の意思と威力を誇示するものであり，その意向に逆らうには大きな犠牲を払う覚悟が必要とされることをみせつけた。社会民主党の一員として会議に参加したケムニッツの地区組織指導者 H. ヘルムスドルフが後年のインタビューで，会議は「息苦しい雰囲気」に包まれ，「不安が漂っていた」と証言しているのは，そのことを表している。そればかりか, 共産党の「合同要求をはねつけることは逮捕につながるという懸念」さえ社会民主党側の参加者は抱いており，統一反対派に属したヘルムスドルフは，ケムニッツへの帰路の安全は保証できない状況にあるとグローテヴォールから告げられたほどだった（Suckut 31）。社会民主党の一員だった W. シュタインコップが会議にソ連の将校が立ち会っていたとしつつ，会議が終わった「12 月 21 日の夕刻にわれわれは窮地を脱した」と記して安堵感を洩らしているのは（Dok.12），それだけ緊迫した空気が漲っていたことを伝えている。

それはともあれ，切り崩しを受けて慌ただしく決まった会議だったため，地域組織の代表が多い社会民主党の 30 人には十分な準備ができていなかった。会議への招請状が届いたのが直前だったので，事前の調整をする時間的余裕が不足していたからである。合同の方針で最初から結束していた共産党側と比べれば，その点は明らかに不利だった。しかもこれには，党内の意見が一本化していないという不利が重なったのであった。

会議の初日には，それまでの経緯を踏まえ，社会民主党を代表してグロー

テヴォールが共産党に対する批判的見解を披瀝した（Dok.13）。彼はまず，共産党が「自分自身で告知した民主主義的原則と合意された善意の協力の精神」で行動していないと批判した。党内で「民主主義に対する共産党の信念の誠実さに対する疑念が高まりつつある」ことや，「社会民主党員に対する非民主的な圧迫の証言が増大している」のは，その結果だった。さらにSMADによる共産党の優遇も批判の的になった。共産党はその支援により活動面で著しく優位に立っているだけでなく，優遇は「ソ連占領地区のすべての機関，すなわち，中央行政機関，州と地域，郡と自治体の行政機関における共産党の数字面その他の優越した強い影響力の容認に表れて」いた。それゆえ,「共産党の優越的地位の完全な除去」と「社会民主党と個々の党員に対するあらゆる不当な影響力の留保のない放棄」がなされない限り，対等な統一は不可能だとされたのである（Weber（3）125f.）。

このようなグローテヴォールの批判の基底には，守勢に立たされてはいても現実には社会民主党が優位にあるという自信があった。それはG. クリンゲルヘーファーやダーレンドルフなどにも共有されていて，彼らの同趣旨の発言が続いた。こうした議論で補強しつつ，本題の合同問題に関してグローテヴォールは基本的に従来の主張を繰り返した。その要点は三つあった。第1は，社会民主党は全国組織を目指しており，求められるのは，ドイツ全域での両党の合同でなければならない。第2は，統一問題を決定できるのは，全国的な党大会だけということである。もしソ連占領地区だけで組織統一を決めるならば，それはドイツの分裂につながる可能性があるからである。第3は，全国大会での決定が出るまでは，将来の選挙に関して共産党が要求する統一リストによるのではなく，両党が別々のリストで臨むことである。これら3点の留保は,ミュラーが指摘する通り,事実上「共産党の考える統一への拒絶以外の何物でもない」といってよかった（Müller（2）18）。そのため，合同を協議するはずの60人会議の初日は険悪な空気に包まれて終わった。それだけに注目に値するのは，翌日になると状況が一

変していたことである。

初日の会議が終わった夜，社会民主党の幹部たちはSMADに呼び出され，「建設的な話し合い」を行った。その詳細は不明なままだが，翌日の豹変ともいうべき姿勢の変化から推し量れば，かなりの威圧が加えられたことは想像に難くない。またこの日には前述したヘルメスたちの党首解任という強硬手段がとられたことを考えても，政党を馴化するSMADの強い意思が作動したと捉えるのが妥当であろう。その話し合いがSMADの発意によるのか，それとも共産党からの提案なのかは明らかでないにしても，両党の溝が埋まらない事態にSMADが苛立っていたのは確実だった。SMADの本部の置かれたベルリンのカールスホルストの建物はドイツ国防軍の代表としてカイテル元帥たちが5月8日夜に降伏文書に調印した場所であり，そこに赴くグローテヴォールたちは恐怖を拭えなかったと察せられる。共産党を厳しく批判したのに加え，その合同要求を実質的に撥ねつければ，逮捕という最悪の事態も覚悟しなければならなかったからである。現にすでに9月の時点で彼の周辺から11人が突如消息を絶ち，安否が分からなくなっていたのであった（Heimann（1）32, 39f.）。その意味では誰一人拘束されなかったのは寛大さの故ではなく，SMADが会議の成功を重視していた表れであり，社共の合同がソ連の実力によって押し付けられたという外観が生じるのをできるだけ避ける狙いによると思われる。

このようなSMADの介入によって社会民主党の抵抗は撃破された。ベルリンの社会民主党で活動していたアンドレーアス＝フリードリヒが日記に，「カールスホルストでの話し合いは明け方まで続いた。行った時と帰ってきた時とでは別人のごとくだった。グローテヴォールは直ちに統一すべしとの意見の急先鋒となって帰ってきたのだった」と書き記し（アンドレーアス＝フリードリヒ 148），同党幹部だったF.ノイマンが後年，あるインタビューで，その夜，「そこで何が起こったか誰も知らず」，「グローテヴォールもその夜に起きたことについて一言も語っていない」が，「そのとき以来，

我々は別人となったグローテヴォールと対面した」と述べているのは（若松 54），社会民主党の屈服が周囲には豹変と映ったことを物語っている。事実，2 日目の会議では社会民主党の代表たちから共産党を批判する発言は消え，共産党が提示した決議の案文に若干の修正を加えただけで了承した。具体的には上記の 3 点の留保条件のうち社会民主党の自立性のよりどころである全国性に関わる二つが盛り込まれず，統一リストに関する第 3 点だけが取り入れられたのであった。また地域レベルの合同党員集会で統一に関する決議をして統一を進めるという，社会民主党には下からの圧力のように映る原案も削除され，合同の具体的な日時も未定のままにされた。会議終了後に開かれた共産党中央委員会の席上，ピークは統一リストに関して共産党が敗北を喫したと語ったといわれる（Müller（2）18）。けれども，その言葉とは逆に合同について原則的合意をした点で会議を制したのは共産党であり，それに比べれば統一リスト問題は小さな譲歩だったといってよい。

ともあれ，60 人会議の決議は，初日とは打って変わって，これまでの経験は「統一行動の政治の正しさを完全に確証し，統一運動の活力と強さを証明した」と述べ，「労働運動の政治的組織的な統一の即時の実現は・・・緊急を要する国民的必要である」と高唱している。その上で，社共が合同した政党の役割として，「労働者や勤労者の広範な政治的，経済的，社会的権利を法的に保障する反ファッショ・民主主義的議会制共和国を建設するという意味でのドイツの民主的革新の完成」を目指すことが合意されたことを告げている（Suckut 30）。この点に関し，マリーヒャたちは，「決議で統一党の全般的目標，本質，性格は大筋で輪郭が定まったものの，合同が具体的にどのように行われるのかは不明なままだった」と記しているが（Malycha/Winters 31），基本的な方向が確定したことが社会主義統一党の成立過程で決定的ともいえる意義を持つのは多言を要しないであろう。けれども，その一方では，SMAD の介入が露骨になり，共産党の攻勢が強まる

なかで，社会民主党の抵抗と退却が目立ち，合同会議の開催に応じたことに照らせば，60 人会議までに既に「社会民主党の自立性の終焉は時間の問題だった」というミュラーの冷徹な指摘は（Müller（5）18），いささか誇張の感を免れないにしても，大筋では決して間違っているとはいえない。因みにグローテヴォールは 60 人会議の翌々日の 12 月 23 日に統一問題に関して決議の文言を随所に織り込んだ演説を行った。そこで彼は「労働運動の過去から教訓を引き出し，統一党への労働者の合同を準備すべき歴史的瞬間が訪れた」とした上で，「1945 年 12 月 21 日は二つの労働者政党の 60 人の代表者が同志的な一致と完全な結束の中で統一したドイツ労働者政党の建設の礎石を据えた日としてドイツ労働運動の歴史に刻み込まれるだろう」と述べ，決議の大きな意義を説いている（Dok.14）。そこに見られるのは，会議初日のグローテヴォールではなく，翌日の別人になった彼の姿だったといってよいであろう。

ところで，社会主義統一党の成立過程で重要な位置を占める 60 人会議を例にとって，ここで社会主義統一党の公認党史の特徴に言及しておこう。

その顕著な特色は，ミュラーが「社会民主党の自立性の終焉」と見做す 60 人会議が，公認の党史では評価が正反対になり，大きな進歩として位置づけられている点にある。それによれば，「労働者階級の敵たちは，あらゆる手段を用いて共産党と社会民主党の合同に対抗した。どのような犠牲を払ってでも，かれらは，ドイツ労働者階級の革命的統一党の成立を阻止したかったのである。帝国主義占領諸国とドイツの独占資本は，労働者階級の統一に，自分たちの反動的計画にとっての重大な危険を感じとった。このたたかいの結果が何をもたらすかを，彼らはきわめてよく知っていたのである。」このように述べた後で党史は，「反動は，クルト・シューマッハーを先頭とする反共主義的な社会民主党右翼指導者たちに統一運動に対する主要な攻撃をかけさせた」とし，「このような統一に敵対する路線を，ダーレンドルフ，ゲルマーやクリンゲルヘーファーのような社会民主党の中央

委員会の成員ないしは職員さえもが追求した」と記して，名指しで幹部を批判している（SED 中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所 92f.）。ここではシューマッハーに代表される「社会民主党右翼指導者」と「反動」勢力との一体性は自明で説明を要しないものと見做される一方，統一反対派はもっぱら帝国主義や独占資本の走狗として描かれており，糾弾の対象とされているのが目につく。しかしながら，それだけに重要になるのは，前述したとおり，60 人会議から半年前の社共両党の設立当時，統一を拒否したのは共産党だった事実である。その事実が党史では完全に抜け落ちているのは，史実の歪曲という非難を免れないであろう。同様に，60 人会議に至る過程で，そして会議の当日にさえも SMAD の強圧や共産党による圧迫が加えられた点も重要であり，それによって社会民主党が譲歩を余儀なくされた結果，60 人会議に至ったのが事実であるにもかかわらず，党史では圧迫にも全く論及されていない。これらの点から，党史と名乗りながらも解釈以前の史実の率直な確認というレベルで著しく一面的であり，歴史の偽造とまではいえなくても歪曲に等しいことが公認の党史の特徴といわねばならない。なお，わが国にも近江谷や上林をはじめとするいくつかの著作が存在したが，いずれも公認党史と同工異曲であり，そのために社会主義統一党が消滅した現在ではほとんど忘れられてしまっていることを付言しておこう（近藤(7) 47f.）。

## 5．社共合同の決定と社会主義統一党の創設

### (1) 60 人会議から社会主義統一党創設へ

1945 年暮れに開かれた社共両党の 60 人会議は，上記のように重要な決定を行ったが，しかし，そこから社会主義統一党の成立まで一直線の道が延びていたわけではなかった。社会民主党の人事にまで影響する SMAD の介入が行われ，それによってテューリンゲンのホフマン，ザクセンのブッフ

ヴィッツ，メクレンブルクのモルトマンなどいくつかの州組織の委員長ポストを統一推進派が占めていたものの，大勢としては党内で彼らは依然として少数派だったからである。

60 人会議の決議は社会民主党の内外に大きな波紋を投げかけた。統一反対派から見れば，合同を認めたことにより指導部は共産党に屈服し，自立性を放棄したかのように映ったからである（Heimann（1）41）。そうした印象は，増大しつつあった一般党員の間だけではなく，西側占領地区の社会民主党関係者にも共有された。1946 年 1 月 4 日と 6 日に相次いで開かれたアメリカとイギリスの占領地区の活動家会議で，共産党とのあらゆる協力への反対が表明されたのはそのためだった（Vorstand der SPD 10）。この場でシューマッハーは，「ドイツ共産党員には独立性が著しく欠如しており，彼らはロシアの愛国者になり下がってしまった。彼らにとってはドイツも社会主義もひっきょう第二義的なものにすぎなくなっている」と痛撃し（Dok.15），そうした共産党との合同は国民への背信に等しいと主張したのであった。こうした見地から 60 人会議を屈伏とする理解が広がったのは，選挙に関わる統一リストの拒否を除くと社共合同に対する留保が決議に明記されておらず，会議初日の社会民主党による抵抗の痕跡も見出せなかったためであり，同党が合同に積極的であるかのようにさえ解釈できたからである。年が代わって早々の 1946 年 1 月 15 日に開かれた社会民主党の中央委員会で 60 人会議の決定の扱いが中心議題とされたのは，このような状況が現出していたからだった。これに先立ち，1 月 8 日に開かれた共産党の会合で，占領地区レベルでの合同を否定する社会民主党の主張を認めないという決定が行われたが（Müller（3）18），その情報が伝わったことも背景にあったと考えられる。

議論の結果，中央委員会では 4 つの確認事項を記した文書が作成された。そのうちで重心が置かれたのは第 2 項である。そこには「組織的統一の創出は全国党大会の決定によってのみ行われうる」と明記され，60 人会議で

社会民主党が唱えたものの決議には盛り込まれなかった従来の主張が再び掲げられていた（Dok.16）。このことは，60 人会議の決定が実質的に否認され，それ以前の段階に逆戻りすることと同然だった。それはまた，60 人会議の決定が SMAD に無理強いされたものであり，本音からの同意に支えられていないことをも暗黙裡に物語っていた。

統一反対派の論理を再現したそのような確認事項が公表されたなら，60 人会議の決議で動揺した社会民主党の党内が再び大揺れになることは火を見るより明らかだった。同時にそれは抑え込まれたはずの統一反対派を活気づけ，共産党との軋轢が再燃するのを不可避にすると考えられた。中央委員会はこの文書を地方の組織に送付しようとしたが，SMAD が発送を禁止する措置をとったのは，おそらくそうした思慮に基づいていた。事実，文書は地方組織には届かず，後になってその存在を知ったという証言がある（Schulz 84）。そればかりではない。中央委員会は 1 月 26 日に開かれた会議で改めて方向転換し，強化された圧力に屈することになったのである（Müller（2）18）。その席では「強い圧力」について語られ，「即時の合同に対する賛否を表明させるために指導的な同志を個別に SMAD に呼びつける計画がある」ことが知らされて，「自由と生命を失う不安に包まれた」ことをシュタインコップはメモに書き残している（Dok.12）。そうした強圧は，これまでと同様に SMAD から発していたが，それだけでなく，巻き返しを狙うブッフヴィッツなど党内の統一賛成派や共産党からも圧力が加えられ，この局面では地方レベルでの圧迫が顕著になっていた。ダーレンドルフは回想録で，確認事項という中央委員会の「決定の作用」について次のように伝えている。「とくに州と地域の幹部会が直面していた地方におけるテロはますます強まった。中央委員会の決定の知らせを一般の党員にもたらすことは禁じられた。それに違反する者には意見表明の禁止に加え，逮捕が待っていた。様々な地区組織から中央委員会に報告が届いたが，それによれば占領権力の機関から多種多様な措置によって社会民主党に圧力が加え

られた。党の書記たちは解任された。個々のケースでは逮捕が行われ，別のケースでは脅迫に晒された。家宅捜索が行われ，意見表明の禁止が言い渡された」（Dok.17）。

このような強圧と並んで，種々の強要も行われた。60 人会議の席では，地域レベルの統一行動による中央への突き上げは統一を進める方策として否定されたが，グニフケによれば，「至る所でソ連の司令官によって即座の合同が強要されている」のが現実であり，この点では各地からの報告が一致していた（Müller（2）19）。SMAD は社共両党の合意を無視して行動し，個々の党員に対しても「統一の先駆者」として率先して行動するように働きかけた。例えばメクレンブルクでは州の幹部に統一のためのモデルとなるように要請したことが知られている。また SMAD の後押しでテューリンゲン州委員長になった統一推進派のホフマンも，1946 年 2 月の幹部会で批判を浴びた時，ソ連が彼に統一を命じたと弁明したといわれる。

このようなソ連の動きの背後には，ドイツ問題に重大な関心を払っていたスターリンの意図が働いていたのは当然であろう。彼は 1946 年 2 月 2 日のウルブリヒトとの協議の際，社共合同の重要性を強調するとともに，新党の名称を社会主義統一党とすることにも言及した。さらに合同の日程を 4 月末までとするように指示したのである（Wettig 28）。3 月 18 日に開かれた SMAD と共産党指導部との会合は，このようなスターリンの意向を踏まえていた。その場では社会民主党内の合同反対派がよく組織されていることが報告され，もはやいかなる説得も役に立たないことが確認された。残るのは実力行使だけであることについて少なくとも暗黙の一致がなされたのである。

そうした SMAD が突きつける要請や命令が，予想される制裁を考えればほとんど拒絶する余地のないものだったことは想像に難くないであろう。1946 年 2 月 4 日にグローテヴォールと会談したスティールは，その際のやりとりについてこう書き記している。「自由と全体主義との相違があるのに

社会民主党が共産主義者と一緒になるなどということは我々には理解できないと私が言うと，グローテヴォールはこう答えた。事はプログラムの問題ではなくて，剥き出しの事実の問題だ。社会民主主義者は個人として最強の圧力に晒されているだけでなく，地方の組織は既に完全に浸透されている。断固として抵抗する決意だと 4 日前に請合った人たちが，それをなかったことにしてくれと今では哀願している。これらの人々には，職場を提供するという約束から白昼の拉致にいたる考えうるあらゆる圧迫が加えられている。そしてもし自分が中央委員会とともに抵抗を続けるなら，全員が首を切られるだけに終わるだろう」（Dok.18）。

このようなグローテヴォールの発言は，当時の情勢認識として興味深いばかりでなく，後から見れば誇張の面が認められるものの，大筋では妥当な判断だったといってよい。というのは，西側でも同様な見方が示されていたからである。例えば西側の社会民主党の指導者でシューマッハーに続く党首になったオレンハウアーは，60 人会議が開かれた 1945 年 12 月から社会主義統一党が設立された 1946 年 4 月までの 4 カ月間にソ連占領地区では少なく見積もっても 2 万人の社会民主党員が処罰されたとし，比較的短期から極めて長期に及ぶ収容所送りだけでなく，処刑されるケースもあったと述べている（Vorstand der SPD 10）。彼らの中にはナチによって多年にわたり刑務所や強制収容所に囚われていた党員も含まれており，そのなかで敗戦に伴い一旦は解放されたものの，再び逮捕されて処刑された党員として，ゲルリッツ出身の M. マイゼ，ルードルシュタットの G. ハルトマン，ゲーラの A. グロースなどが知られている（Weber（6）35）。またウルブリヒトが残したメモなどから，行政機関で働いていた社会民主党員の行動が監視され，反ソ・ビラの作成や電話での指示が共産党員によってソ連側に密告されていたことも今日では明らかになっている（Koop 140）。もっとも，抑圧の象徴とされる特別収容所の収容人数や収容理由などと同様に，マリーヒャたちが指摘する通り，社会民主党への抑圧の犠牲者に関する正確なデー

タは今もって明らかになっていない（Malycha/Winters 31）。DDR で出版された文献にもっぱら依拠していた近江谷は，隠蔽されたこれらの事実に気付かないまま，ソ連占領地区には社共の「統一を実現するために有利な条件」があったとし，「ソ連軍政府の存在が生み出した有利な条件とは，軍政府の徹底した民主化政策が，労働者運動の自由な発展を保障し，それを積極的に支持したことである」と記している（近江谷 261）。けれども，今日から振り返れば，ソ連の「民主化政策」がその名に値しなかったことは明白だし，近江谷のいう「有利な条件」には，SMAD の意向に沿わない政治勢力に対する露骨な干渉と抑圧が含まれていたことを忘れるわけにはいかない。ともあれ，ここで確実にいえるのは，暴力によって沈黙を強いられた社会民主党員の数がたとえオレンハウアーのいうほど多くはなかったとしても，シュタージの拉致被害者である K.W. フリッケが命名したとされる「合同反対者に対する包囲戦」（Wetzel），すなわち社共合同に向けての SMAD の介入が暴力的で，かつ大規模だったことである。実際，ベルリンの中央委員会が圧力を押し返そうとして方針を二転三転させている間にも，地方では残されていた自立性が力で押しつぶされていったのである。

2 月 8 日にダーレンドルフも同席してグローテヴォールとシューマッハーとの会談が行われたのは，こうした状況下においてだった。場所に選ばれたのは，シューマッハーの拠点のハノーファーに近く，グローテヴォールのかつての地元でもあるブラウンシュヴァイクである。グローテヴォールは全国党大会について，60 人会議で決定された社共合同を先送りするための切り札と考えていたが，統一行動も含めて共産党との一切の協力を認めず，当面は占領地区を跨ぐ全国組織の建設も否定するシューマッハーを翻意させることはできなかった。後者から見れば，共産党との協力を原則的に拒否しないグローテヴォールは信用できなかったし，共産党がソ連の傀儡であることを洞察できない彼の情勢認識は余りに甘いと感じられたであろう。会談で愛国者を自認するシューマッハーは，外国の手先との交渉の

余地はないと断じ，ソ連が帝国主義的権力であり，共産党との協力はドイツの利益にならないことを改めて力説したうえで，社共の合同がもはや止められないなら，ソ連占領地区の社会民主党を解散すべきだと勧めた（Malycha/Winters 33; 近江谷 240）。地方組織を標的とする SMAD の圧迫で窮地に立たされていたグローテヴォールは会談に起死回生の一縷の望みをつないでいたが，その最後の期待もこうして断たれた。「東の社会民主党を自主解散する決定をしようという試みは間違いなく失敗しただろう。そしてそれは確実に多大の犠牲を生んだであろう」（Schulz 85）。そうした予測に立つなら，自主解散は無理だったのである。

会談でグローテヴォールが表明した通り，60 人会議で動き出した社共合同はもはや停止可能な段階を過ぎていた。それゆえ，「ストップウォッチに従った合同はない」というグニフケの言葉の通り，それにブレーキをかける方策として残されていたのは，合同の日程を先延ばしすることだった。とはいえ，当然ながらそれにも限界があった。1946 年 2 月 9 日から 11 日にかけて自由労働総同盟の設立大会がベルリンで開催されたが，それと並行する形で社会民主党中央委員会は地方組織の代表を集めた会議を開き，そこで共産党との合同を正式に決定した。無論，この決定自体はもはや時間の問題になっていたので，とくに驚きを呼びはしなかった。その意味では会議の主題は先送りしてきた合同の日程にあり，共産党の 5 月 1 日までという提案にどのように応じるかが焦点だった。

この会議の様子についてはグニフケが報告している。それによると（Weber（3）129），この場では合同が既定路線になっていたにもかかわらず，その是非を巡って激しい論議が交わされ，ダーレンドルフが解党を訴える動議を提出する一幕もあった。この動議は採決にかけられずに葬られたが，他方で，州委員長のホフマンやモルトマンたちが「もはやこれ以上の圧力には持ちこたえられない」と叫んで即時の合同を要求した。けれども，この主張は 10 日の会議では多数の支持を得られなかったため，彼らは合同の日時が決

められないならば，地元組織の負託に基づいて中央委員会との関係を断ち，州レベルで合同を進めると威嚇した。その結果，翌 11 日の会議でグローテヴォールとフェヒナーが提起したイースターの時点での合同という動議の採決が行われ，3 票の反対と 4 票の棄権で社共の統一日程が決定されたのである（Dok.19）。その決定は大会最終日だった自由労働総同盟でグローテヴォールにより，共産党のウルブリヒトが立ちあって直ちに公表された（Weber（3）129）。因みに，こうして結成される社会主義統一党の理論的土台になる A. アッカーマンの「社会主義への特殊ドイツの道」に関する論文が発表されたのは，会議前日の 2 月 9 日だった（Dok.20; Weber（2）10）。また決定への見返りとして，中央委員会に SMAD から 6 台の新車，食糧 20 箱が届けられたほか，この頃から社会民主党に対して便宜の供与や物資の提供が行われるようになったともいわれている。例えば 3 月初めにグローテヴォールの要請に基づき，40 トンの紙と 400 ガロンのガソリンが贈られたとされている（Bärwald 21f.）。他方で，会議のこのような結果に失望し，ソ連占領地区の社会民主党で「もっとも傑出した指導者的人物」といわれたダーレンドルフが新たな政治活動の場を求めてイギリス占領下のハンブルクに移ったのは，直後の 2 月 17 日のことであり（Malycha/Winters 34），幹部クラスの西側逃亡の代表例になった。

以上のようにして社共の組織的合同とその時期が確定し，すべてがこの線上で進み始めた。前年 12 月の 60 人会議では双方から 4 人が参加して合同に関わる事項について調べる調査委員会が設置されていたが，そこでは社会民主党の方針が固まらないにもかかわらず，新党の綱領や規約について検討されていたのであった。この委員会は 2 月になって社会民主党の動揺が鎮静すると，合同のための組織委員会として位置づけられるようになった。同時に，それはまた合同を牽引する中心的機関の役割を果たすことになった。というのも，そこで練られた綱領と規約の素案をもとにして第 2 回目の 60 人会議が 2 月 26 日に開催され，新党の綱領などの草案が決定さ

れたからである（Vorstand der SPD 10）。

こうして新党設立に向けて準備が進められていった。その過程では，後述するように，共産党の側からソ連を唯一のモデルとするのではなく，社会主義に至る多様な道の承認に基づいて「社会主義への特殊ドイツの道」を目指すことが確認され，レーニン主義的な幹部政党とはしないこと，役職を社共で対等に配分することなどが約束された。こうして新党の骨格が固められていったが，指導部レベルにおけるこのようなプロセスから下部ないし地域レベルに視線を転じると，二つの注目すべき動きが現出していた。一つは，共産党の攻勢に屈して社会民主党の自立性が希薄になり，行動の自由を失っていったにもかかわらず，党員の増加が続いていたことである。もう一つは，党員投票の実施への要求が強まったことである。

まず第一点に焦点を絞ろう。

社会民主党中央委員会のまとめでは 60 人会議が開かれた 1945 年 12 月に党員数は 37 万 6 千人だったが，3 ヶ月後の 1946 年 3 月末には 2 倍近い 68 万 1 千人に達した。しかも 3 月の数字には後述する首都ベルリンの党員は含まれていないので，文字通り倍増したと考えて間違いない。3 月の時点までには社共合同が固まり，共産党の主導が明白になっていたにもかかわらず，党員は増加の勢いを示したのである。このことは, 社会民主党が繰り返した「共産党の合同キャンペーンへの抵抗が社会民主党への殺到のブレーキにならなかった」ことを意味している（Vorstand der SPD 12）。その原因を考えると，とくに重要なのは，共産党とは異なる社会民主党に対する期待が大きかったことだと思われる。既述のように，共産党は広く占領権力であるソ連と一心同体と見做されていた。そのことが個人的な利得や便益を追い求める人々を引き寄せる誘因になったのは容易に推察できるし，食糧難や住宅難など当時の窮状を想起すれば，その誘因が強力だったのも納得できる。けれども反面で，戦争終結前後にソ連軍兵士が繰り広げた大規模な略奪やレイプの記憶が生々しく，加えて重大な経済的打撃となる大がかりなデモンタージュも眼前

で進行中だったことを考慮するなら，反ファシズムを掲げても共産党に支持が集まりにくかったのも見落とせない。また非ナチ化の名目でナチ関係者ばかりでなく，ソ連にとって不都合と見られた人々が無差別に拘束されたが，その粗野な措置が一般市民の間に恐怖心を掻き立てたことも，SMAD に支えられた共産党にはマイナスに作用した。要するに，政治からの退却が基調になっていたことを度外視すれば，社共両党が高唱した労働者階級の統一や民主主義建設への共鳴は，共産党ではなく社会民主党に対する期待として表出しやすい構造が存在したのである。けれども，社会民主党を優位に立たせるこのような構造が形成されたがゆえに，ドイツ再建の主役を目指す共産党には，社会民主党は危険な競争相手と感じられることになった。共産党が合同によって社会民主党から自立性を奪い去り，統一党として主導権確保を図る方向に転換したのは，社会民主党が劣勢だったからではなく，むしろ優位にあったからなのである。

次に第二の注目点に目を向けよう。それは，合同への道を歩む社会民主党指導部から距離を置き，合同に当たって党員投票の実施を求める動きが顕在化したことである。

ソ連占領地区における社共合同は SMAD の実力によって支えられていたから，事実上，党員投票の可能性は存在しなかった。自由意思に基づく投票で反対意見が多数を占めれば，合同の強制性が明白になるからである。そのため，党員投票には特別の条件が必要であり，それが存在したのはベルリンだけだった。なぜなら，ソ連占領地区に囲まれた首都ベルリンは戦勝 4 カ国の同市に関する協定に基づいて分割されていたので，市全体にはソ連の影響力は及ばなかったからである。

党員投票の着想を誰が最初に打ち出したかは明らかではないが，それへの言及は, SMAD が発行していた新聞である 1946 年 1 月 1 日付『テークリッヘ・ルントシャウ』に見出される。そこには社会民主党の幹部フェヒナーの論説が掲載されたが，そのなかで彼は合同問題に関する同党の方針を説

明し，全国党大会によってのみ決定できるとした上で，「必要な場合には原投票が実施されるべきである」と述べたのである。一方，1 月 6 日に開催されたロストックの社会民主党の地区集会も「民主的な政党では党員の意思が最高の法でなければならない」という理由で，同様に原投票を行うことを要求した（Dok.21）。この要求は地元では検閲によって党機関紙への掲載が禁じられたが，ベルリンで発行されていた社会民主党の機関紙『人民』によって知られるところとなった。1 月 22 日にはドレスデンの社会民主党機関紙が地元組織の同一の決議を掲載したが，すぐにソ連の検閲機関によって回収された（Müller（2）19）。さらに 2 月 5 日のポツダムにおける拡大幹部会も同趣旨の決議をしたことが知られているが（Dok.22），それが周知されたか否かは明らかではない。いずれにせよ，SMAD 文書の調査に基づいて A. ハリトノウは，「1946 年 2 月には社会民主党員の間で，党員の多数が賛成する場合にのみ合同は正当であるという見方が広範に見られた」ことを確認している（Haritonow 411）。けれども，SMAD の介入と圧力の結果，現実に党員投票が実施可能なのは 4 カ国管理という特殊な条件のあるベルリンだけになった。

中央委員会の膝元であるベルリンには市の全域をカバーする地区組織があり，H. ハルニッシュがそれを指導していた。前年秋以降の組織的統一に向けた共産党の強引な介入に反撥を強めていた地区組織では合同反対派が主流であり，60 人会議の直後にも幹部会はその決定を「議論の基礎」としてだけ認め，拘束されるのを拒否した。1946 年 2 月 11 日に社会民主党中央委員会が上述した合同方針を決定したとき，そうした下地のもとにベルリンでは明確な反対派が形成され，党員投票に向かって進み始めたのであった。

4 月 2 日付の SMAD の詳細な報告によれば，党員投票を求める「ベルリンの社会民主党組織の右翼反対派は同盟国によって励まされ，支援されていた」。その証拠とされたのは，アメリカとイギリスが「右翼社会民主党員に新聞，印刷設備，ありとあらゆる物的・技術的手段を用立てて，・・・党

員投票阻止を妨げるための熱心な活動」を行ったことだった。それゆえに米英の策動への「対抗措置が是認された」として報告はソ連側の工作を正当化しているが（Dok.23），それは党員投票を阻むのに失敗したことへの弁明のように映る。いずれにせよ, 3 月 1 日にはベルリンの活動家会議がグローテヴォールたちの反対を押し切り，F. ノイマンの起草した原投票を求める決議案を採択した。これに対し，3 月 27 日に中央委員会は党員に対して投票のボイコットを訴える決定を公表した。同時にベルリンのソ連占領地域ではソ連の司令官によって投票が禁止され，西側占領地域でだけ党員投票が実施されることが固まった。この時点で東西ベルリンへの分裂の兆しが現れたのである。

投票は 3 月 31 日に行われた。そこでは 2 つの争点について意思表示が求められた。争点の第 1 は,「君は共産党との即時合同を望むか」, 第 2 は,「君は共産党との共同活動を望むか」である。投票したのはソ連占領地域を除く 2 万 3755 人であり，結果は，第 1 問については，望む者が 2937 人，望まない者が 1 万 9529 人だった。一方, 第 2 問では望む者 1 万 4663 人に対し，望まない者 5559 人だった（Rupieper 22）。第 1 問では「望まない」が投票総数の 82.2% に達したから，合同への反対が大勢を占めたことは明白だった。しかし，共産党との共同活動には 62.1% が賛成したことを考え合わせれば，即時の合同には反対でも，将来の合同まで否定する党員が主流だとはいえなかった。その意味では合同問題に関する明快な選択が行われたとはいえないにしても，当面の方向として合同は否定されたと解するのが妥当であろう。ベルリン東部やベルリン以外では推測の域を出ないが，即時合同に関しては,「ベルリン西地区のこの投票結果からして，かなり否定的な意見が多かったことが窺われる」という加藤の見解は決して的外れではない（加藤 241）。因みに，SMAD は投票が禁止されたソ連占領地域の社会民主党員はすべて合同に賛成の立場と見做し，同時にこの地域を含むベルリン全体で約 6 万 6 千人の社会民主党員がいるという二つの前提に立って，

即時合同に反対するのは全党員の 29.5% にすぎなかったと主張し，自らが妨害した党員投票での合同反対派の失敗を強調している（Dok.23）。けれども，評価の前提が歪曲されている以上，このような解釈が事実に反しているのは指摘するまでもないであろう。

中央委員会の反対を無視して実施された合同問題を巡る党員投票は，大きな波乱を引き起こした。当時，イギリスに滞在していた R. レーベンタールは，シューマッハー宛ての書簡で「ベルリンの活動家たちは党の名誉を守った」と評したが（Heimann（1）43），その代償は高くついた。ベルリンでは社会民主党が分裂に至ったのである。

投票から 1 週間後の 4 月 7 日にベルリンでは新しい地区組織が構築された。結党の場所から共産党はそれを「ツェーレンドルフ病院クラブ」と揶揄したが，その傘下にはそれまでの社会民主党員の多数が結集した。一方，共産党との合同に従って新党に移ったのは，ソ連占領地域を中心にして総数で 6 万 6 千人のベルリンの党員のうち 2 万 4 千人だった。西側占領地域に生まれたベルリンの新たな社会民主党では党首 F. ノイマンのほかに C. ズヴォリンスキー，K. ゲルマーが指導者に選ばれ，O. ズーアが幹事長に就任した。後にベルリン封鎖当時の E. ロイターや壁建設時の W. ブラントなど著名な西ベルリン市長を輩出して存在感を発揮する社会民主党の母体になったのはこの組織であり，合同で新党ができるまでの短い間，ベルリンには二つの社会民主党が存在した。さらに 1961 年にベルリンの壁が建設されるまで，ベルリン東部にも社会民主党の組織が置かれ，DDR 政府による妨害や党員に対する差別などにもかかわらず活動を続けた。東ベルリンのこの社会民主党が組織としての活動を最終的に停止したのは，壁によって東西ベルリンが完全に遮断され，往来が事実上不可能になった 1961 年のことだったのである（Wolle 2941ff.; Heimann（2）421ff.）。

ベルリンにおける社会民主党の分裂は，社共合同が社会民主党側の自発的な意思に基づいていない実態を浮き彫りにした。その意味では，公認の

党史が「どのような障害や攪乱工作をも乗り越えて，統一運動は着実に進んでいった」と記しているのは正確ではない（SED 中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所 98）。実際，分裂によって社会主義統一党の成立史には大きな汚点が残ったことは否めないのである。しかし，そうした波乱を伴いながらも，2 月 11 日に社会民主党の中央委員会が合同の方針に踏み切って以降，「イースターまでの合同」を実現するための手順が定められ，合同が強力に推進されたのも事実だった。すなわち，まず地区レベルの共産党と社会民主党がそれぞれ党大会を開き，続いて合同大会を開催すること，それを踏まえて州レベルで両党が同様に別個の党大会を開いたうえで翌日に合同することが確定されたのである。この筋書きに従い，ベルリンを除くすべての地区で 3 月 30 日に党大会，31 日に合同大会が開催され，4 月 6 日と 7 日に州レベルで同じ大会が執り行われた。またベルリンでも他より 1 週間遅れて同一の大会が開かれた。こうした手順を経て 4 月 20 日に両党の党大会でそれぞれ合同を決議したうえで，翌 21 日の合同大会で社会主義統一党が誕生したのである。

（2）社会主義統一党の創設－綱領的文書と組織

それでは 1946 年 4 月に創設された社会主義統一党はいかなる性格の政党だったのだろうか。次にこの問題を検討しなくてはならないが，それを明確にするためにも，ここまでの叙述を踏まえていくつかの誤解を予め解いておこう。

最初に指摘すべき誤解は，社共合同は一貫して共産党が唱えたとするものである。こうした理解は今日まで広く見出されるが，その背後には，設立当初から社会民主党が圧力に晒され，遂には共産党に飲み込まれたという被害者としての社会民主党というイメージがある。東の出身でドイツ統一後に社会民主党の副党首を務めた W. ティールゼの「欺瞞，強制，抑圧」と題した論考はその代表例であろう（Thierse 21f.）。けれども，そうした被

害者像は真実とはいえない。実際，これまで見てきた通り，ソ連占領下の東部ドイツにおける社共両党の合同は一直線に進んだのではなかった。また，それを最初に提起したのは，1945 年 6 月にグローテヴォールなどによって設立された社会民主党の側だった。設立の初期には共産党は自党に不利だとして，むしろ性急な合同を拒否していたのである。したがって，当初から共産党が合同に積極的であり，やがて圧力を行使して合同に至ったというしばしば見られる見解は史実に反するといわねばならない。社会主義統一党の成立史は想像に反して著しくねじれていたのであって，1945 年秋以降に社共の立場が入れ替わるという入り組んだ経過を辿ったのである。

第 2 は社会民主党の屈伏の問題である。ウェーバーは「グローテヴォールは中央委員会の他の指導者たちとともにソ連占領当局の圧力と共産党の攻勢に屈した」と述べる一方で，反共主義者の「シューマッハーは合同するとソ連占領下の統一党内の社会民主主義者に何が起こるかを広い視野で予見していた」として（Weber（6）33），後者の先見性を高く評価している。そうした見方のバリエーションとして広く見受けられるのは，社共の一切の協力を撥ねつけた後者と対比する形で，グローテヴォールなど主要な指導者が原則として社共合同を否定しなかったことを洞察力の欠如の表れと見做し，その短所が軟弱さにつながったとする見解である。こうした見方の根底には，反共派と容共派を対置して，後者の限界や過ちを指弾するという構図がある。たしかに今日からみると，労働者階級の統一という大義に引きずられた彼らに共産党の認識で甘さがあったのは事実といえよう。けれども，そのことが SMAD と共産党による圧迫が強まったときに，ほとんど抵抗しないまま簡単に屈服した原因だったと考えるのは，短絡の誹りを免れない。社会民主党が共産党の専横を前にして自立化の傾向を強めたことや，圧力に抗したために多大の犠牲を払ったことに照らせば，屈服を語るには慎重さが必要とされるし，合同の原則的肯定は軟弱さに直結するわけではないからである。例えば 60 人会議で公然と共産党を非難し，短兵

急な合同にブレーキをかけたグローテヴォールの演説は，会議の前に地方の社会民主党活動家に加えられた弾圧を想起するなら，かなりの勇気を要したのは間違いないであろう。

第3に，今日ではほぼ通説として定着している観のある強制合同という把握に関しても，やはり誤解が付きまとっているように思われる。合同までに強圧があったことはこれまでに明らかにしたので，ここでいう誤解は強制の有無に関わることではない。問題になるのは，東ドイツが建国され，社会主義統一党の独裁が確立した後の同党を成立期のそれと同一視することに起因する誤認といえる。すなわち，他の政党や社会団体を伝導ベルトに変質させるとともに，党内では民主集中制を軸にスターリン主義化した社会主義統一党のイメージに基づき，このような政党に実力を手段として社会民主党を吸収するプロセスとして強制合同を描く捉え方に誤りがあるといわねばならない。そうした捉え方は広くみられるが，その場合，飲み込まれる客体としての社会民主党が弱体だったということが当然視されており，強力な共産党に屈する以外に道が残されていなかったということが自明の前提とされている。けれども，繰り返し指摘したように，史実に照らすならば，たとえ指導部は次第に窮地に追い込まれていったとしても，党勢では社会民主党が優位に立っていたのであり，それを背景にして「党員の間では，社会主義統一党で社会民主主義者は自己のアイデンティティを維持できるし，じきに党をコントロールできるだろうという考えが広まっていた」のが現実だった（Suckut 35; Spilker 51）。共産党が合同路線に舵を切ったのも，社会民主党の優位を克服するためにほかならなかったのである。

これに関連して，第4に，SMADと一体になって社会民主党を圧迫した共産党は，ドイツの再建に当たって社会主義を目標に掲げていたのではなく，私有財産制を承認し，議会主義を標榜する穏健な路線をとっていたことも重要になる。社会民主党が強制合同によって一体になったのは，穏健な要求を掲げる共産党であって，社会主義の建設を目指すと公言する共産

党ではなかったのである。実際，第三帝国の瓦解に伴って再出発した共産党が仮にヴァイマル期と同一の急進路線をとっていたなら，いかに圧力をかけられても，社会民主主義者であるグローテヴォールやグニフケたちが共産党との合同に踏み切ったとは想像しにくい。換言すれば，共産党の穏健路線が同党への心理的障壁を低くし，合同を可能にした重要な要因だったといえよう。社会主義統一党の成立を強制合同と呼ぶのは限定を付ければ間違っていないとしても，一方の政党が確信からかどうかはともあれ，社会主義を目標とするのではなく，その旗を降ろした共産党だったことを視野に入れておくことが必要とされる。往々にしてこの事実を忘失して強制合同が語られるだけに，その理解には誤解が含まれていることに注意しなくてはならないのである。

以上でやや先回りして主要な論点に言及したが，このように見てくるなら，創設された社会主義統一党がどのような政党だったかを一瞥しておくことが必要とされよう。

社会主義統一党の創立大会はベルリンのアドミラルパラストで 1946 年 4 月 21 日と 22 日に開催された。大会議事録の冒頭には，当日，会場前の路上が歓喜する数千人の群衆で埋められていたと記されている。大会には社会民主党から 548 人，共産党から 507 人の代議員が参加した。この時点の党員数が前者は約 68 万人，後者は 62 万人だったので，その差が代議員数にも反映された。会場前方の演壇中央にはマルクスの彫像が据えられ，その後ろの幕にはアウグスト・ベーベルとヴィルヘルム・リープクネヒトの大きな肖像が掲げられていた。そこには共産党なら定番のはずのレーニンやスターリンの像はなく，社共に分裂する前の共通の精神的父祖への記憶が蘇る演出がされていたのである（Benz 127）。大会では最初に演壇の左右からグローテヴォールとピークが登場して中央に歩み寄り，前者が挨拶の最初に「我々両名は中央で出会うために来た」と述べて満場の拍手に包まれた（Dok.24）。グローテヴォールは印刷工，ピークは家具職人の出身だっ

たから，両者の握手は労働者階級の統一を象徴していた。その後の議事の過程では，最初に大会議長に選出されたフェヒナーが「労働運動の統一が初めて果たされた」1875 年の意義を示して原点の一致を強調する反面,「別々に行進した分裂した労働運動が別々に打倒された」1933 年の教訓を想起させた（Dok.24）。また，議事のなかでは，ウルブリヒトが新党を社共両党の単なる合同ではなく,「ドイツ労働運動の新生」であると性格づけ，ピークが「単一政党システムの独裁」は目標ではないと明言したのが注目される（Weber（3）132）。

新党の出発に当たり，大会では綱領的文書となる「社会主義統一党の原則と目標」が満場一致で決議された（Dok.25）。これについて後年，DDR 最高指導者としてホーネッカーは,「レーニンが『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』において，民主主義革命の社会主義革命への成長転化に関して述べた認識が創造的に適用されていた。この綱領は，同時にまた，ドイツ労働者運動と国際的労働者運動，とりわけソ連共産党の重要な経験を含むものであった」と語り（SED 中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所 101），あたかも社会主義統一党がソ連を模範とするレーニン主義的な共産党であるかのように解説している。このような解釈は，出発点から同党が事実上の共産党として首尾一貫していることを強調して，同党がレーニン主義的な政党に改造された事実を糊塗する政治的意図から出たものと思われる。というのも，共産党の設立アピールで打ち出した穏健路線と類似した要求が 14 項目にわたって「社会主義統一党の原則と目標」に明示されていて，レーニン主義とは程遠いところに特色があるからである。

この文書は前置きに続く 3 部から成る。第 1 部「現在の要求」, 第 2 部「社会主義のための闘争」，第 3 部「社会主義統一党の本質」である。第 2 部では「社会主義統一党は民主主義的共和国を土台とする新国家のために闘う」と述べ,「社会主義統一党は社会主義への民主主義的な道を追求するが，資本家階級が民主主義の地盤を捨て去る場合にだけ，革命的手段に訴える」

として，民主的立場を強調している。また第 3 部ではソ連の傀儡という批判を想定して，社会主義統一党は「もっとも進歩的で最良の国民的勢力」であり，「自国で独立した政党として，人民の真の国民的利益のために闘う」と記されている。こうして民主的かつ国民的な政党であることを力説する一方，いわゆる最小限綱領に相当する第 1 部の「現在の要求」では，戦争に責任のある者の処罰や破壊された都市の再建などと並んで，「資本主義的独占の除去」，「法定の標準労働日としての 8 時間労働」，「団結権，ストライキ権，協定締結権の保証」，「労働者と職員の法定代表としての経営評議会の承認」などが挙げられている。さらに，「民間のイニシアティブをとりいれた上での工業と手工業における必需品生産の計画的促進」も明記されている。

これらの要求を見る限り，資本主義を否定するのではなく，その修正を目指していることは明白であり，ルッツのように大土地所有の解体を軸とする土地改革や資本主義的独占の除去を目して「社会主義的・共産主義的傾向」をいうのは行きすぎのように思われる（Ludz/Ludz 1163）。そうだとするならば，これらの要求が目標とされる社会主義にどのようにして通じるのかは曖昧なままだといわねばならない。その点から，文書を全体として眺めれば，最終目標は社会主義とされているものの，現実の日常活動には改良主義的な色彩が濃厚に刻み込まれることになったのは当然であろう。周知のように，ドイツ降伏後の西側占領地区でも総体として社会化の要求が強まり，創設されたキリスト教民主同盟においてすら，アーレン綱領に見られるように社会主義的傾向が色濃くなっていた（野田 92ff.；近藤 26f.）。それどころか，私有財産制と市場経済を擁護する政治勢力のほうが弱体だったといっても過言ではないであろう。そうした事実を想起するなら，社会主義統一党の「原則と目標」に掲げられている要求は，急進性の点で西側を大きく超えているとはいえない点がむしろ注目に値する。共産党の設立アピールと同様に，それらは全体として穏健な社会民主主義的路

線を示していたとみて間違いないのである。

綱領的文書に打ち出された社会主義統一党の基本的性格は以上のように把握できるが，そうだとすれば，同党の公式の党史の誤りも明白であろう。そこには次のように記されている。社会主義統一党を創設した「第 1 回党大会の意義は，労働者階級とその同盟者たちの闘争に科学的に基礎づけられた目標と明確な方針を示す綱領に基づいて，合同がなされたことにある。合同が科学的社会主義の強固な基礎の上で行われたという事実こそ，その発展のどのような段階においても，マルクス，エンゲルス，レーニンの学説によって導かれるプロレタリアートの革命的闘争党として，社会主義統一党が系統的に発展していくことを保証するものである」（SED 中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所 105）。ここには合同時点の社会主義統一党を後年のレーニン主義的革命党と同一視する発想が前面に押し出されているといえるが，これを額面通りに受け取ることができないのは明らかであろう。

それはさておき，「社会主義統一党の原則と目標」にはそのほかにもいくつかの注目点がある。その第 1 は，ホーネッカーの主張とは反対に，文書の中にはレーニンの名前やレーニン主義という言葉が登場しないばかりか，当時のソ連では省略したら重大な処罰につながったスターリンにも触れていないことである。一見すると些細なこの事実には，しかし重要な事柄が映し出されていた。第一次世界大戦後の社会民主主義からの大分裂以降，ソ連を筆頭とする各国の「共産党はレーニンとスターリンに依拠していたが，社会主義統一党は少なくとも創設の時点では，マルクス，エンゲルスをイデオロギー的指導者とするドイツの社会主義政党だと自らを規定していた」（ウェーバー 39）ことである。レーニン主義ではなくマルクス主義を拠り所とするのであれば，社会民主党の側でも同意することが可能だった。マルクスとエンゲルスならば社共両党の共通項であるにとどまらず，社会民主党自身の精神的父祖であり，労働者階級の統一という大義にも相応し

ていたからである。

第 2 は，国民的で民主的な立場が強調されている点である。ここで国民的ということは，裏返せば，ソ連の利益を至高とせず，またソ連をモデルとしないことを含意していた。一方，民主的という言葉は社会民主党と共産党では相反する意味を持ち，勤労大衆の意思と利益を重視するという理解が共通する程度だったから，玉虫色の表現だったといわねばならない。実際，民主的と言いながらも，共産党の指導者たちの場合，歴史の発展法則を知悉したエリートを自認していたので，異なる意見の尊重は期待できなかったし，国民的であることについても，国際主義の原則や労働者階級の立場とどのように整合するのかは曖昧だった。しかし他方で，「独立した政党」としてソ連に従属しないことや，すぐに「革命的手段に訴える」のではなく，幅広い支持を得て社会主義を目指すことが意図されていたのは確かといえる。同時に，これらの点では，合同に先立って共産党のアッカーマンが唱えた「社会主義への特殊ドイツの道」の理論が背後に置かれていたことにも留意すべきであろう。

文書から離れて，組織面に見られる特色についても触れておこう。

大会では組織に関する規約が決定されたが（Dok.26），そこに至るまでには摩擦があった。問題になったのは基礎組織の扱いだった。伝統的に社会民主党は居住地域グループを基礎組織としてきた。同党が地域社会に根を張り，合唱団からスポーツ・クラブに至る多彩な活動を展開でき，社会民主主義的なミリューを形成できた土台には，この基礎組織が存在していた。他方，共産党は事業所に築いた経営グループを基礎組織とし，資本と対峙する階級闘争の主柱にしてきたのであった。そのため，社会主義統一党でどちらを基礎組織とするかは，両党の伝統が衝突する重大な争点になったのである。そうした経緯を踏まえ，新党の規約の 9 条では次のように定められた。「1. 居住地域グループと経営グループは，党の基本単位である。2. 企業には経営グループが設置されなければならない。・・・企業で働く党員は，

さらにその居住地域のグループ，ないしは彼らが籍を置く地区グループの活動に参加することが義務づけられる。3. 経営グループに組織されない党員は居住地域グループに組織される」（近江谷 275）。一読して明らかなように，組織問題では社会民主党は引き下がらず，共産党も譲歩しなかったので，両党の主張の並列でひとまず妥協した。しかし，妥協は長くは続かなかった。この問題が共産党の方向で決着するのは 1950 年の第 3 回党大会の場においてであり，それまでには社会主義統一党のスターリン主義化が行われていたのである。

組織に関するもう一つの注目点は，いわゆる対等原則が打ち出されたことである。党首が 2 人とされ，共産党からピーク，社会民主党からはグローテヴォールが就任したのは，その端的な表現といえる。また副党首には両党からフェヒナーとウルブリヒトが選出された。もちろん，この原則が党首や副党首のような党の頂点だけではなく，党組織の全体に適用されたことを見過ごしてはならない。末端の居住地域グループと経営グループをはじめとして，中央と地方の各級の組織をへて党幹部会や中央書記局まですべてのレベルで指導的ポストが両党の出身者に平等に割り振られたのである。例えば党の頭脳に当たる中央書記局は 16 人で構成されたが，両党から 8 人ずつが名を連ねた（Weber（5）24）。このような措置が導入されたのは，社共両党の出身者の間の融合を促進し，同志的な結合を強める意図に発していたのは改めて指摘するまでもない。しかし，そのことを裏返してみれば，対等原則が経過的な措置であり，適材適所の原則に反するところから，融合が進展した段階で廃止される公算が大きいことを含意していた。事実，この原則は早くも 1949 年 1 月に開催された社会主義統一党の第 1 回全国協議会で廃止が決定されたのである。けれども，注意を要するのは，対等原則は社共「両党の融合が進むにつれて，次第に無意味になった」（近江谷 277）ために廃止されたのではなかった点である。それとは反対に，現実には合同から間もなく後述する「社会民主主義（Sozialdemokratismus）に対す

る闘争」が鼓吹されたことが示すように，社会民主党出身者が攻撃を浴びて排除されるようになり，共産党出身者が社会主義統一党を制圧した結果，対等原則は有名無実になって撤廃されたのが真相というべきであろう。その地点から振り返るなら，社会主義統一党が出発時に対等原則を導入したのは，社会民主党を引き寄せるために共産党が用意した好餌であり，戦術的な譲歩だったという見方も成り立ちうるのである（Müller（2）19f.）。

もちろん，このような理解は，決して単なる憶測ではない。合同に先立って共産党の幹部たちが繰り返し新党における共産党のヘゲモニーを要求した事実があるからである。例えば3月にピークは「首尾一貫したマルクス・レーニン主義」を新党の堅固な土台と呼び，レーニン主義的前衛党に特徴的な鉄の規律と民主集中制を唱えてこう述べた。「党の頂点にマルクス・レーニン主義によって完全に染め上げられた活動家の一群が立ち，この学説に支えられて党員たちが，党が解決すべき偉大な課題を認識するときにだけ，新党は成果を上げることができるのである」（Müller（5）20）。これと同様に，指導者の一人 H. マテルンは4月初旬の会合で，社会主義統一党は共産党の「一層の発展」になるとして，共産主義者は「社会主義統一党にわれわれのすべての伝統，すべての経験，緊密な結束を持ち込むだろう」と公言した。また，幹部の W. ケーネンも「レーニンがわれわれに教えた民主集中制は自己批判というレーニン主義的原則とともに社会主義統一党の共有財産にならなければならない」と力説している。これらの発言から浮かび上がるように，共産党の指導部では，対等原則を通じて社会民主主義者との融和を図るのではなく，党内でのレーニン主義の浸透を意図していたのであった（Weber（3）130f.）。社会民主党と共産党が合同するに当たり，党員数で優位に立つ前者には，新党で主導権を握ることが可能だと期待する空気が漂っていたが，共産党の側にはそのような淡い願望ではなく，社会主義統一党を制圧する強い意思が存在していたのである。

## 6. 社会主義統一党の変容－共産党系による制圧へ

### (1) 創設当初の社会主義統一党

以上のようにして，ドイツ降伏から1年にも満たない1946年4月にやがて独裁政党としてDDRを支配する社会主義統一党が姿を現した。しかし，誕生の時点の同党は，大衆的な支持を欠落したまま，権力を用いて上から社会主義を作り出していく後年の社会主義統一党と同じではなかった点には注意を要しよう。この点を含め，当時の政治的状況に関するズックートの要約は示唆深い。「社会主義統一党が追求した反ファッショ・民主主義的変革の政策は1946年半ばには重要な点で多数派を形成できるものだった。党はまだ人民に反して統治してはいなかった。社会主義統一党と並んで，同党と競合する自立的な政党がまだ存在していた。成立した経済的・社会的秩序はまだ『社会主義への特殊ドイツの道』という見出しのもとに包摂可能なものだった」(Suckut 39)。誕生したばかりの新党は，古い社会民主党でも，はたまた古い共産党でもないことを内外に向けてアピールした。けれども，党首が二人存在し，その顔ぶれがそれまでの両党の党首だった事実や，舞台の中央に進み出て握手する二人の広く振り撒かれた写真を一見すれば，誰の目にも新党が社共の妥協の産物と映ったのは当然だったろう。そうした印象は，党外だけでなく，ある程度までは一般の党員によっても抱かれた。なによりも新党ではそれまでの共産党の穏健な路線が再現されて社会民主党の側でも受容できたし，その上，レーニンの名前がなく，ソ連モデルも取り入れられなかったからである。そうした面から，社会民主党員の間では，SMADと共産党による圧迫のために自立的な政党としてとどまるのが困難になった以上，社会主義統一党への合同はやむをえない次善の選択だったと受け止められても決して不思議ではなかった。また党員数での優位に加え，穏健路線や対等原則などが，新党の内部で社会民主党系の主導権獲得とまではいかなくても，その基本的立場を受け継ぎ，長

い伝統を維持することも不可能ではないという，希望的観測の混じった判断に傾かせたのも理解できなくはない。こうした判断は，居住地域グループが基礎組織として継承されたことや，民主集中制が排除されたために党内で比較的自由に活動することが可能とされたことによって一層強められていたであろう。B. ブービエはこれを次のように要約した上で，誤った考えと断じている。「自分たちの数の上での強さもしくは優越への信頼，自分たちの組織を手つかずに維持し，条件を課し，自分たちの伝統と目標を守り，場合によっては社会主義統一党という実験を取り消すことができるという思い込み」である（Bouvier 35）。事実，やがて連合国のドイツ占領政策が変わり，それを引き金にして社会主義統一党の「新しい型の党」への転換が始まると，そうした思い込みや願望は次々に裏切られ，社会民主党系の人々は苦い現実に直面させられることになる。

もっとも，社会民主党の側でこのような期待が広く共有されていたわけではないことは，ベルリンでの党員投票の結果が明確に示していた。そして強まる圧力にもかかわらず，共産党との合同に最後まで従わなかった人々も少なからず存在していた。明らかになっている限りでは，メクレンブルクの同党の党員 8 万 1 千人のうち約 2 万人が社会主義統一党に入らなかった。またマグデブルクでも 5 千人が新党への移行を拒否し，ライプツィヒでは 3 分の 1 の党員がやはり加入しなかった。特殊な条件が存在したベルリンでは，党員投票から推察されるようにその割合は遙かに大きく，社会主義統一党に参加したのは同市の社会民主党員の 3 分の 1 にとどまったのである（Vorstand der SPD 13）。

他方，合同に反対したため，身の危険を感じるようになった幹部も存在した。SMAD による拘束を逃れるためにやむなく，あるいは新たな活動場所を求めて，彼らはベルリン西部や西側占領地区に逃亡した。すでに指摘したダーレンドルフはその代表例だが，それ以外にもテューリンゲンの最高指導者だったのに統一推進派のホフマンにとって代わられ，西に逃れた

H. ブリル，メクレンブルクで州組織の書記長を務め，後に西側でシュレスヴィヒ＝ホルシュタイン州の州首相になった H. リューデマンなどが比較的知られているケースであろう。両名ともナチス期に強制収容所にとらわれて辛くも生き延びた経験の持ち主だが，このようにして脅迫，逮捕，投獄によって沈黙を強いられた党員ばかりでなく，中央・地方を問わず中核となるべき有能な党員が失われたことは，社会民主党にとって長く尾を引く打撃になったことは容易に推察できよう。

こうして社会主義統一党に多数が参加したものの，一丸となって行動した共産党とは違い，不参加者や逃亡者が続出して社会民主党の側は痛手を受けていたが，それでもなお残っていた新党への待望感は次第に幻想にすぎないことが明らかになっていく。

社会主義統一党が発足して 1 年余りの間に占領 4 カ国の占領政策には大きな変更が生じた。敗戦後のドイツの食糧難をはじめとする窮状は深刻であり，援助物資の負担は戦勝国に重くのしかかった。そのため，負担の軽減を主眼にして賠償政策を見直す必要が高まった。戦争により物心両面で甚大な被害を受けたソ連に対しては西側占領地区からも賠償の提供が認められていたのに，社会主義統一党の結党から 1 か月が経過した 1946 年 5 月 25 日にアメリカ地区からソ連への賠償物資の搬入が停止されたのは，そうした流れのなかでの出来事だった。また 9 月 6 日にはアメリカのバーンズ国務長官が対ドイツ政策の転換点と目されるシュトゥットガルト演説を行った。これについて H.A. ヴィンクラーは，「賽は投げられた。いよいよ西ドイツ国家の建設の道筋が見えるようになった」と評しているが（ヴィンクラー 126），事実，これを起点にして 1947 年 1 月 1 日には，戦争による疲弊のためにドイツでの占領管理の余力がなくなったイギリスの占領地区とアメリカ占領地区とが統合されて二国占領地区が発足し，ドイツ分断の兆しが感じられるにいたった。このような推移の底流には，ドイツ弱体化からドイツ復興への政策目標の重大な転換があった。それは対ドイツ援助

の重荷をおろすためだけではなく，ヨーロッパ経済の要であるドイツが脱落すればヨーロッパの再建は覚束ないという認識が共有されるようになった結果だった。そうした転換の方向は，1947 年 3 月 13 日の対ソ封じ込めを基調とするトルーマン・ドクトリンの発表と 6 月 5 日に打ち出されたマーシャル・プランによるヨーロッパ復興計画によって一段と鮮明になった（クレスマン 121）。これを契機にして東欧諸国の復興計画参加を巡る軋轢が生じ，翌年 3 月のチェコスロヴァキア政変を頂点とするスターリン主義体制の東欧への押しつけの伏線になるとともに，米ソの緊張関係が高まり，ドイツを含めてヨーロッパ分断の動きが加速化したのである。

一方，ソ連占領地区の内部でも注目に値する動きがあった。なかでも重要なのは，共産党が強引に社会民主党と合同したものの，期待したようには新党に対する支持が伸びなかったことである。それを如実に示すのは，1946 年 10 月に行われた州議会選挙だった。この選挙は後の DDR の時代も含めて東部ドイツで戦後に行われた唯一の自由な選挙だったといわれる。しかし，実際には様々な妨害が行われたことには注意を要する。実はこの選挙の直前の 9 月にも自治体の選挙が実施された。このときには SMAD による妨害が著しく，実態は自由選挙には程遠かった。というのは，例えばブルジョア政党に対して候補者擁立に必要な自治体での政党組織設立の許可が出されず, あるいは出すのが故意に遅らされたりしたからである（Wettig 32）。そのため, 社会主義統一党は得票率で 76.2% に達したにもかかわらず, 圧勝ということはできなかったのである（近藤（5）40; 表 1 参照）。

表１　自治体選挙（1946 年９月）の各党の得票率

| | SED | LDP | CDU | VdgB | FA | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ブランデンブルク | 73.0 | 7.2 | 9.4 | 9.2 | 0.8 | 0.4 |
| メクレンブルク | 90.3 | 1.6 | 5.7 | 2.0 | 0.4 | 0.0 |
| ザクセン | 75.7 | 8.3 | 12.2 | 3.7 | 0.1 | 0.0 |
| ザクセン＝アンハルト | 78.6 | 10.0 | 7.6 | 3.6 | 0.2 | 0.0 |
| テューリンゲン | 63.1 | 13.6 | 12.3 | 8.7 | 1.8 | 0.5 |
| 全体 | 76.2 | 8.3 | 9.5 | 5.2 | 0.6 | 0.2 |

注　VdgB　農民相互扶助連合
　　FA　　女性委員会
出典　Siegfried Suckut, Parteien in der SBZ/DDR 1945-1952, Bonn 2000, S.43.

これに比べると，州議会選挙では SMAD の介入が限定的だったことから，自由な選挙に近かったと見做されてきた。同時に，この理由により，州議会選挙では東部ドイツの住民の意思がある程度まで反映されたと見られる点，および選挙結果を受けてソ連占領地区で州政府が形成され，州憲法が制定された点でこの選挙は重要な意義を有した。だが，それだけに発足して日の浅い社会主義統一党にとって選挙結果の衝撃は大きかった。なぜなら，メクレンブルクで成人人口の 15% といわれるように，ナチ関係者とされた市民を排除して選挙が実施されたにもかかわらず（Schwabe（2）51），表 2 が示す通り，どの州でも社会主義統一党の得票は過半数に届かず，議席配分でも過半数を制するのに成功しなかったからである。ザクセン＝アンハルト州についてトゥルナーは，「州議会選挙の本質的な結果は，社会主義統一党が予期せぬ敗北を喫したことである」とし，「なるほど社会主義統一党は最強の政党になったものの，選挙での目標達成に根本的に失敗し，選挙結果を厳しい敗北と捉えた」と述べているが（Tullner 62f.），この言葉は各州に当てはまるといえよう。実際，5 州平均でみても得票率は 47.6% に終わり，キリスト教民主同盟と自由民主党の合計を下回ったのである（Malycha/Winters 48）。

表２　州議会選挙（1946 年 10 月 26 日）の各党の得票率

| | SED | LDP | CDU | VdgB | FA | 文化同盟 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ブランデンブルク | 43.9 | 20.6 | 30.6 | 4.9 | − | − |
| メクレンブルク | 49.5 | 12.5 | 34.1 | 3.9 | − | − |
| ザクセン | 49.1 | 24.7 | 23.3 | 1.7 | 0.6 | 0.6 |
| ザクセン＝アンハルト | 45.8 | 29.9 | 21.6 | 2.5 | − | − |
| テューリンゲン | 49.3 | 28.5 | 18.9 | 3.3 | − | − |
| 全体 | 47.6 | 24.6 | 24.5 | 2.9 | 0.2 | 0.2 |

注　VdgB　農民相互扶助連合
　　FA　　女性委員会
出典　Martin Broszat und Hermann Weber, hrsg., SBZ Handbuch, München 1993, S.397.

そればかりではない。既述のように，ベルリンでは合同に反対した社会民主党員が多く，党組織そのものも残ったため，選挙では全市を土俵にして社会民主党と社会主義統一党が競う形になった。そして結果は，前者が 48.7% の得票率で最多だったのに対し，後者は 19.8% しか獲得できず，大敗に終わったのである（Rexin（2））。アンドレーアス＝フリードリヒは日記に，「ベルリンの女性たちはロシア人の愛人たちに反対投票した」という社会主義統一党を支持するある女性の言葉を記しているが，ベルリン陥落当時に荒れ狂ったソ連兵によるレイプの嵐を含むソ連の占領支配に対する反感が社会主義統一党の敗因だったことを端的に伝える表現といってよい（アンドレーアス＝フリードリヒ 175）。マリーヒャたちは，「1946 年 10 月の選挙結果を指導部は二度と再び民主的な選挙に関わるなという警告のシグナルと見做した」と述べるとともに，「社会主義統一党は 40 年以上にわたる支配の間，一度も国民の多数の支持を得ることができなかったことに異論の余地はない」として，その始点に州議会選挙を位置づけている（Malycha/Winters 10）。その後も選挙は行われたものの，自由な選挙とは程遠い統一リスト方式によるものであり，そのカラクリによって大衆的支持があるかのような虚構だけが作り出されることになったのである。

こうして社会主義統一党が創設された 1946 年から翌年にかけて，一方ではヨーロッパ再建を巡って米ソ対立が顕在化し，国際的な緊張が高まると

ともに，他方，国内的には社共合同を強行したものの社会主義統一党への支持が広がらないという状況が露わになった。ヴェティッヒによれば，1947 年 1 月 1 日に米英の占領地区が合体したのを受け，1 月 31 日に社会主義統一党指導部と会見したスターリンは，3 月のモスクワ 4 カ国外相会議で 4 占領地区の統合を進める方針を示した上で，会議が不調に終わった場合，党内の社会民主主義者の影響を排除し，ソ連共産党をモデルとする規律を導入するように指示した（Wettig 34,36）。同年 9 月の第 2 回党大会で新しい型の党を建設することが決定されたのは，これを踏まえていたのは指摘するまでもない。キリスト教民主同盟などのブルジョア政党に対する締め付けが強められると同時に，社会主義統一党の内部で社会民主党系の抑圧や排除の動きが出てきたのは，このような背景からだった。こうした動きについて，例えばマリーヒャたちは概括的に次のように書いている。「1948 年に公式に告げられる党の粛清以前にすでに伝統的な社会民主主義的政治・社会構想の支持者たちはあらゆるレベルの党の指導機関から排除され，誹謗され，犯罪者扱いされ，追放された。こうしたやり方で 1940 年代末には社会民主主義的な考えの支持者たちには社会主義統一党にもはや基盤がなくなり，自分の主張を公言したり，党の指導部に影響を及ぼしたりすることはできなくなったのである」（Malycha/Winters 52）。このような認識に基づいて彼らは 1947 年から 1952 年までを「ソ連をモデルとする政党への社会主義統一党の転換」の時期と規定しているが，これに比べると国際情勢を重視して 1948 年 5 月の SMAD 幹部テュルパノフの問題提起を転換の起点のように位置づけるシュターリッツなどの見解は説得力に欠けると考えられる（Staritz（2）5）。たしかに上記の 5 年間を一括することには後述する問題点が残るものの，1947 年で時期区分することは基本的に正しいのであり，この見地から次に社会主義統一党の変容について考えよう。

(2) 社会主義統一党の変容

ソ連占領下の東部ドイツを取り巻く国際環境は米ソの対立を軸にして1947年に大きく変わり始めた。一方，ドイツ再建の主導権を握るために社会主義統一党が創設されたにもかかわらず，選挙結果が示すように国民からの支持は乏しく，指導的地位の確立には程遠かった。そのため，アメリカとの緊張の高まりを見据えつつソ連は自国が占領する東部ドイツ地域を「西側に対する強力な橋頭堡」にする必要に迫られるが，そこで課題として浮上したのが，社会主義統一党をソ連に忠実な伝声管に作り変えることだった。上述のとおり，創設時点の同党は改良主義的路線を明示し，国民的かつ民主的な政党であることを謳ったが，ソ連の意向を反映して，創設1年にして顕在化した新たな状況に対処するために変貌を遂げるようになる。一般にスターリン主義化と呼ばれているプロセスがその変貌の内実である。

社会主義統一党の変容について考える時，前述したマリーヒャたちが1947年から1952年までの5年間を「ソ連をモデルとする政党への社会主義統一党の転換」と捉えていることが手掛かりになる。彼らが1952年を画期として重視するのは，恐らく東部ドイツの政党システムに着眼しているためであろう。たしかにキリスト教民主同盟などのブルジョア政党が社会主義統一党の指導権を承認して最終的に同党に屈服し，衛星政党に変質したのは1952年であり（Suckut 103ff.; 近藤（5）28f.），言葉の正確な意味での反対党ないし野党が消滅して，一党独裁を隠蔽する外見だけの社会主義的多党制が構築されたという意味では，この年を重視するのは正しい。また政党システムから社会団体や行政システムなどにまで視界を拡大した場合，1952年を強制的同質化の完成の年と呼ぶこともできよう。

しかし，社会主義統一党に焦点を絞るなら，「新しい型の党」に社会主義統一党が改造された1949年が重要になる。というのは，この改造が着手されたのは1947年であることに間違いはないものの，それと合わせて，DDRが建国された1949年の初頭に社会主義統一党第1回全国協議会で重大な決

定が下されたことも見逃せないからである。すなわち，その場では党の基本的立場として「マルクス，エンゲルス，レーニン，スターリンの不滅の旗」を掲げることが決議され，従来は社会民主党の立場を考慮して除外されていたレーニンとスターリンの名前が付け加えられた（Weber（1）19）。それにとどまらず，同時にまた，分派活動を認めず，上部機関への絶対的服従を要求する民主集中制の導入や，設立の際の社共の対等原則の廃止などが決定され，それによって組織構造が鉄の規律を特徴とするスターリン主義的な共産党の形に換骨奪胎されたのである（SED 中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所 170; Weber（4）25; Wettig 64）。この点に関してウェーバーは，「1949 年 1 月の社会主義統一党第 1 回党協議会は，党の路線転換にけりをつけ，同時にスターリン主義化したという点で画期的なものであった」とし，「社共同等の原則や，社会主義への特殊ドイツの道という理論を撤回し，党内粛清を開始することによって，社会主義統一党はその創立当時の統一党としての原則を放棄してしまった」と述べている（ウェーバー 45）。無論，多数の社会民主党系の党員を抱えたままであり，その抵抗を予想して粛清が継続されたことを考えれば，同党のスターリン主義化は完了したというよりは，最初の頂点に達したと考えるのが正確であり，ベンツのように，「レーニン主義的原則に基づく指導機関への社会主義統一党の改造は 1949 年初頭に完了した」（Benz 126）と言い切るのは行き過ぎの感がある。しかし，ウェーバーの指摘する通り，第 1 回全国協議会が党史上重要な位置を占めているのは確かであり，社会主義統一党が「新しい型の党」へと変貌を遂げた 1949 年を重要な区切りとして捉えることが適切だと考えられるのである。

ところで，社会主義統一党のスターリン主義化の過程は，社会民主党系に対する抑圧と共産党系による社会主義統一党の制圧が進行していく過程でもあった。そのことは，対等原則が否定されたことからも容易に看取できる。もちろん，社共両党の合同によって設立された経緯がある以上，抑

圧は社会民主党系であることを理由にして行われたのではなかった。創設からしばらくすると「社会民主主義（Sozialdemokratismus）に対する闘争」が公然と唱えられるようになり，1950 年の第 3 回党大会以降に熾烈化するが（Plener 250），それまで名目として使われたのは，西側の社会民主党，とりわけその指導者であるシューマッハーの影響下にあることだった。第 1 回全国協議会の決定には次のように記されている。社会主義統一党の内部にはマルクス＝レーニン主義政党としてのイデオロギー的純化を妨害する分子がいて，「社会主義統一党を西側の色彩の日和見主義政党にしようと画策している。この企ては，階級敵がシューマッハーの代理人を通じてわが党の隊列にスパイと工作者を送り込んでいることによって強められている」（Dok.27）。この決定を受け，クレスマンがいうように，「1948 年以後，スターリン主義的な改造によってボルシェビキ幹部政党へと様変わりした社会主義統一党にとって，社会民主主義（Sozialdemokratismus）は 50 年代まで一触即発の問題であり続け，それは常に除名や迫害によって解決される」ことになった（クレスマン 170）。社会主義統一党の初期を見渡すと，1948 年半ばから 1951 年までの時期に粛清の重心があったことが分かるが，「初めはシューマッハーの手先が，後にはトロツキストのレッテルを貼られた人々が容赦なく党から除名され，犯罪者として処罰された。・・・これによって 1945 年にソ連から帰国したドイツ共産党の狭い指導サークルが党の頂点における地位を強化した」（Malycha（3）21 ）のである。

こうした流れの中で，真偽は別としてシューマッハーの手先だという罪状が暴きだされ，社会民主党出身者への抑圧が繰り広げられたが，その最初の標的として知られるのは，W. イェッセのケースである。彼は創設大会で幹部会員に選出されたにもかかわらず，数週後には反党活動を理由に逮捕され，8 年間を刑務所で送ることになった。また翌 47 年の春にはハレの社会民主党出身者のグループがシューマッハーと協力したという理由で逮捕された。続いて同年 11 月にはザクセン東部の社会民主党の指導者だった

A. ヴェントが除名後に逮捕された。彼は翌 48 年 4 月に 25 年の懲役の判決を受け，多くのドイツ人政治犯が集められたソ連の極北の地ヴォルクタで働かされたのち，1955 年 12 月にようやく釈放された。さらにエアフルトの指導者だった A. ヴェーゼマイヤーと C. エックハルトはスパイの拠点として警戒された西側の社会民主党東部事務所との接触を理由に 1948 年春に逮捕され，「シューマッハー・ファシスト」という烙印を押されて 25 年の強制労働に処され，すぐ後にザクセン＝アンハルト州の行政機構の幹部だった F. ドレッシャーが同じ罪状でやはり 25 年の労働収容所送りとされた（Weber（6）35; Schroeder 39）。

抑圧の初期にはこれらの事例が知られている。しかし，1948 年になると東欧諸国の政変やコミンフォルムからのユーゴスラヴィアの除名に至ったソ連とユーゴの決裂，さらに通貨改革とそれに端を発するベルリン封鎖などが相次いで起こり，それによって国際的緊張が強まったのを受けて，同年後半以降には，抑圧の規模が拡大した。米ソ対立の高まりを背景にして，社会主義統一党の内部で粛清が推進されるようになったためである。ただドイツの分断に関連してソ連占領地区では高位もしくは著名な活動家に対する見せしめ裁判や死刑のような極刑が見られなかった点が東欧諸国と違っていたという指摘もある（Wettig 65）。

社会主義統一党における粛清には数次の波があるが，全体としてみれば 1948 年半ばから 1951 年まで続いたといえる（Malycha/Winters 80）。その第 1 波に当たるのは 1948 年 9 月から 1949 年 1 月までであり，半年足らずの間に約 400 人の党員が西側の社会民主党の手先という容疑で逮捕された。またこうした事態を受けて，1949 年の 1 年間に 5 万人の党員が社会主義統一党から脱退するとともに，１万 2 千人が除名された。そのうちの 4 分の 1 は反ソ的姿勢が理由とされ，西側社会民主党の手先とされた 1600 人は除名だけでは終わらず，大部分は逮捕された（Weber（6）36）。

「新しい型の党」に変貌した後の社会主義統一党ではこうして党内におけ

る抑圧が大規模化していったが，他方で，社会民主党の伝統を保持しようとして活動したグループが弾圧されたのも見過ごせない。H. グレービングたちによると，1947 年にドレスデンに近いフライタールで社会民主党出身者のグループが形成された。彼らは実際にシューマッハーとも接触したが，1949 年にリーダーだった R. ネッチュがソ連の情報機関に逮捕された。またライプツィヒでも同様のグループが作られた。これには 80 人が参加したとされるが，1948 年半ばにリーダーの E. シリングが逮捕されて壊滅に追い込まれた（Grebing u.a. 43）。因みに，社会民主党設立の功労者で，最高幹部となった 4 人のうち，グローテヴォールはピークと並ぶ社会主義統一党の初代党首や DDR の初代首相として権力の中枢にとどまったが，既述の通り，ダーレンドルフは新党創設直前に西側へ逃亡した。これに続いてグニフケが逃亡したのは 1948 年 10 月のことだった。残るフェヒナーは DDR に残留したものの，1953 年に逮捕されて 8 年の懲役刑に処されたのであった（Vorstand der SPD 24f.）。

これらのケースを見渡すと，次の事実が浮かび上がってくる。その事実とは，かつての社会民主党員の多くが労働者階級の統一という大義を信じ，あるいは SMAD と共産党からの強圧に晒されて次善の策として社共合同に従ったにもかかわらず，新党になっても社会民主主義の価値と伝統は骨抜きにされるのではなく守りうるという見通しや期待が裏切られ，深刻な挫折を味わう結果になったことである（Heimann（1）41）。社会民主党系の党員たちにとって，スターリン主義化する以前の社会主義統一党には多かれ少なかれ期待をつなぐことが可能だった。けれども，新しい型の党に変わり，共産党系によって制圧されたとき，同党にはもはやその余地は残されていなかった。また，変質の過程では人的構成の面でも共産党系が主流を占めるようになった。というのも，「設立の際に社会主義統一党に受け継がれた社会民主党員の数十万が，除名，『粛清』，迫害，逮捕，あるいはドイツ西部への逃亡によって党から離脱した」からである（Vorstand der SPD 13）。

第三帝国の興隆と崩壊を身をもって経験し，その痛切な反省を込めつつ，同時に新生ドイツに寄与するために社会民主主義の旗のもとに参集したかつての党員たちは，大部分がドイツの工業化とともに形成された労働者ミリューのなかで育ってきた。けれども，社共両党の合同による社会民主党の消滅と社会主義統一党のスターリン主義化という 2 段階を経て，彼らは長く守られてきた政治的故郷を失ったのである。

他方，これと軌を一にして，社会主義統一党が実質的な共産党に化すと同時に，形骸を残しながら反対党を解体して独裁的地位を固めた時，同党が重大な試練に直面したのも見逃せない。既述のように，マリーヒャたちによると 1952 年は社会主義統一党の転換が終結した時点に当たるが，この年に幹部のマテルンは「事実上我々には新規の入党者がない」ことを憂慮を込めて報告しなければならなかった。それが物語っているのは，強圧による独裁体制構築の裏面ともいうべき一般市民の参加意欲が減退していた事実である。とりわけ深刻だったのは，労働者ミリューに根差し，労働者階級の政党と自称していたにもかかわらず，「創設から 6 年目にして社会主義統一党は労働者層に対してもはや吸引力を発揮できない」状態に陥ったことだった（Mählert 68）。実際，粛清を推し進め，社会民主党系を排除した結果，党員に占める労働者の比率はこの年に 32% まで低下した。そのため，労働者階級の政治的統一という大義に反して，社会主義統一党は現実にはもはや労働者政党とは呼べなくなっていた。それだけに，同党がまさにこの年に社会主義の建設に向けてスタートすることを高らかに宣言したのは，歴史の皮肉というほかないであろう。なぜなら，社会主義の主体ないし担い手になるのは，マルクス・レーニン主義の教説では労働者階級すなわちプロレタリアート以外になかったからである。この矛盾を解消するために推進されたのが，プロレタリアートなき上からの階級闘争であり，強権による上からの社会主義建設だった。そして労働者の主体的参加が欠落している分だけ，参加の作り話が創作されて大々的に宣伝されなくてはならな

かった。労働ノルマをはるかに上回る業績を上げたとしてヘネケのような労働英雄が意図的に作り出されて称賛されたのは（Gries/Satjukow），なによりも主体の不在を糊塗するためだったといえるのである。

## 結び

ここまで主に既存の文献を参照しつつ，社会主義統一党の設立までの経過を追跡してきた。また続けて設立後の同党の変容についても要点に絞って手短に述べてきた。最後にこの主題に関して常に問題とされる強制合同だったのか否かという論点を中心に従来の諸説を検討し，それらの問題点などを考察して小論を締めくくることにしよう。

この点を考える時，本稿でたびたび引証してきたウェーバーが強制合同というだけでは不十分だとして，「強制と欺瞞の合同」（Weber（6）28）という表現を用いるように提唱していることが手掛かりになる。この問題に精通しているミュラーも，「強制合同という非難を相対化することは正当とは思われない」（Müller（2）21）と述べると同時に，合同には「欺瞞的妥協」という性格が刻み込まれているとして（Müller（3）34），ウェーバーに近い見解を提示している。さらに「合同よりも横領について語るのがより正しい」（Schwabe（1）97）というシュヴァーベの見方も表現の厳しさを除けば彼らに類したものといってよい。H. ベァヴァルトによると，西側の社会民主党ではすでに 1947 年に合同に関する文書の見出しに「東部地区における共産党の欺瞞とテロ」という表現が使われていたという（Bärwald 20）。これほど激しくなくても，強制合同という呼び方には，それを創始したダーレンドルフが合同直前に社会民主党の幹部のポストを捨てて西側占領地区に逃亡したことが示すように，最初から強い批判の意味合いが込められていたのは指摘するまでもない。それゆえ，これに欺瞞という語を付け加えれば，告発のトーンが一段と高まるのは当然であろう。

しかし，その一方で，わが国のかつての文献に見られたように，史実を検証することなく強制合同ではなかったと主張するのは論外としても（近藤（7)），昨今では強制の捉え方については幅が広がる兆しがあるのも見逃せない。例えばウェーバーの対極に「同意に基づく服属」と呼ぶ M. ヴィルケたちがいることがそれを示している（Wilke/Erler）。ここでは強制の要素は否定されないものの，社共合同には多様な動機が作用したことが重視され，ひたすら社会民主党の自立性を守ることに党員たちが腐心していたわけではないことが前面に押し出されれている。安野は「ドイツ再統一の実現後，ソ連占領地区社会民主党にかかわる研究は旧東ドイツの史料が利用できるようになってから活況を呈している」と前置きしたうえで，「ただ，結論として『強制合同』であったことを確認し，強調するという一般的傾向に変化はない」（安野 85）と述べているが，実は見過ごせない変化が生じているというべきなのである。

このような幅の広さを念頭において，ここでは強制合同の捉え方に照準を合わせてみたい。

この問題に関して広く見出される誤解についてはすでに論及したが，多少の重複をいとわずに述べるならば，合同で成立した社会主義統一党がスターリン主義化した後年の同党とは異質だったことを想起する必要が大きい。新しい型の党に変貌した社会主義統一党では民主集中制が導入され，社共の対等原則も廃止されたが，出発時にはそれとは違っていたし，レーニンやスターリンの名前がなかったように，マルクス・レーニン主義のイデオロギーで固められた政党ではなかったのである。このことは具体的な政策にも当てはまり，初期には改良主義的な路線をとっていたことも重要であろう。社会民主党の側から見れば，こうした政党であれば提携が可能だという判断が働いたのは当然であり，それが合同への心理的なハードルを低くしたことにも留意が必要とされよう。さらに合同時点では党勢の面で社会民主党が優位にあったことも再確認しておかなくてはならない。社

会主義統一党がスターリン主義化していく過程で幻想性が明らかになったとしても，当初の優位を背景にして，社会民主党出身者の間では同党の伝統を維持できるばかりでなく，新党で主導権を握る可能性もあるという期待さえ抱かれていた。たしかに合同はSMADと共産党の攻勢に屈する形で決定されたが，合同の「過程をもっぱらソ連の占領権力の圧力に帰すなら，それを理解することはできないであろう」し（Wetzel），新党における社会民主主義者の未来が決して最初から暗色に塗りつぶされていたわけではなかったことも看過されてしまうであろう。この問題に関して，後に西ベルリン市長から西ドイツ首相に上り詰めたW. ブラントは，1949年にこう記している。「私は統一政策によって共産党の労働者を堅固な社会主義的政治のほうに獲得できるという希望に導かれていた。この見通しは反証されたかもしれないが，そのことをもって非難を浴びせようとするのは，無知な者たちだけである」（Heimann（1）42）。強制合同というとき，社会民主党がマルクス・レーニン主義的な事実上の共産党に飲み込まれたという印象が生じやすいが，それだけに以上の諸点は繰り返し確認しておく必要がある。要するに，社共の合同にはなるほど強制の側面が濃厚に存在し，それを否定することは許されないとしても，他面で，もっぱら強圧だけで合同に至り，最初から社会民主党系の人々が無力だったかのように考えるのは，事実に反するといわねばならないのである。

そうだとすれば，ウェーバーの唱える「強制と欺瞞の合同」についても，当然ながら疑問符を付けざるをえないであろう。他の東欧諸国の独裁政党と同様に，名称は違っても社会主義統一党が実質的に共産党になった歴史的現実を考えれば，結果論としてはこうした表現が適切のように感じられよう。けれども，合同の時点で欺瞞を語ることは，やはり誇張といわなくてはならないと思われる。トルーマン・ドクトリンやマーシャル・プランなどによって次第に冷戦的構造が形成され，ソ連の対外政策がそれに応じて軌道修正されたのは周知のところであろう。例えば1948年春のチェコス

ロヴァキアの政変はその一つの帰結だったといえるが，それと同様に，ソ連の占領下にある東部ドイツでも社会主義統一党は変化していくことになった。この点に関して M. ヴィルケたちは，「連合国の間での冷戦の勃発に伴い，ソ連占領地区における社会主義統一党の権力をソ連は固めようとした」（Wilke/Schroeder/Alisch 742）と述べているが，これと異口同音にマリーヒャたちもこう記している。「ドイツ問題での西側諸国とソ連との対立が尖鋭化し，冷戦に帰着するようになるにつれて，東部地区における社会主義統一党の権力地位の強化と拡充がソ連のドイツ政策にとってますます重要になっていった」（Malycha/Winters 51）。ここに示唆されているように，冷戦的状況が醸成される中で，ソ連にとってはその対外政策に忠実で，かつ東部ドイツを支配できる実質的な共産党が必要とされたのであり，それに応えて社会主義統一党のスターリン主義化が推し進められたのであった。換言すれば，スターリン主義的な社会主義統一党への改造は発足時点ではまだ射程に入っておらず，その変貌が生じたのは，冷戦的な対立構造が顕在化してきてからだったのである。

このような国際環境の文脈を踏まえるなら，1946 年 4 月の時点には，合同に当たっての社共両党の約束を軽んじるという意味での欺瞞の萌芽は存在したとしても，それが重大な事態にまで発展する必然性はいまだ存在しなかったといえよう。また相手を瞞着し，約束を反故にするという意図が最初から認められない限り，本来，欺瞞という行為は成立しないはずであろう。この意味で，米ソ対立を中心とする国際環境の変動が社会主義統一党を変容させた面が重要であり，約束への不誠実という論点は残るにしても，欺瞞か否かというモラルの次元で論じることは適切とは考えられない。したがって，社共合同を「強制と欺瞞の合同」と呼んで告発するのは誤りであり，強制合同を語るときにも，社会民主党側の大多数の党員が同党の消滅と新党への移行を無理強いされたかのように描くのは誇張といわねばならない。こうした観点から見ると，「社会主義統一党の結成は，強力な脅

しと日和見主義的な順応との産物であった。1946 年春のソ連地区では決定の自由はすでに大きく制約され，『強制合同』という捉え方が真実に近かった」（ヴィンクラー 123）という代表的な現代史家ヴィンクラーの文章には二つの注目点があるといえよう。一つは，社会民主党員の多くが共有したものの幻影に終わった期待が日和見主義と取り違えられ，容共的な社会民主主義の可能性が無視されていることである。もう一つは，それにもかかわらず恐らくは次善の選択という面を考慮して強制合同とは決めつけず，慎重な言い回しをしていることである。

この二つの注目点のうち，とりわけ前者の取り違えには看過できない論点が含まれている。それは，容共的な社会民主主義の無視の背後に，シューマッハーに典型的な反共的な社会民主主義を賢明と見做し，彼の洞察力や先見性を高く評価する通念が透視できることである。わが国では仲井が,「それにしてもシューマッハーの予測は正しかった。社共の同権を装って結成された社会主義統一党は，社会民主党系の指導者が排除されていくなかで，50 年代の末には，レーニン＝スターリン党に変化し，東ドイツにおける社会民主党の伝統は死滅する」と記しているのは，その一例といえる（仲井 19）。同じ敗戦国であっても日本とドイツでは反共主義の政治的位相がまったく異なることや，社会民主党史における反共的社会民主主義の位置づけについての論究はここでは避けるが（近藤（8）），シューマッハーに今日まで与えられている高い評価が，身命を賭してナチと闘った経歴への敬意に支えられている点はやはり見過ごせない。ナチ時代の社会民主主義者の命運をまとめた近年の冊子で,「ナチ独裁の 12 年間に社会民主主義者が晒された苦難と新たな政治的出発への不屈の意思をクルト・シューマッハー以上に体現している者はない」と記されているのは（Schneider 40），その例証といえよう。

とはいえ，そうした事情にかかわらずシューマッハーに代表される反共的社会民主主義と対比する形で容共的な社会民主主義を貶価するのは適切

とはいえない。なぜなら，後から振り返れば虚妄にしかみえなくても，労働者階級の統一はナチスに政権獲得を許したことへの反省に立脚するドイツ降伏後の極めて重要なテーマであり，それを優先するところから社共合同を含む容共的な路線が導き出されたからである。この点を考える際，ドイツの敗北後，左翼台頭への危惧だけでなく，同じ反省に基づいてプロテスタントとカトリックが長い宗派的分裂を克服し，キリスト教民主同盟（CDU）・社会同盟（CSU）に統一されたことが一つの参考になる。

だが，そのために統一優先の立場は共産党への対応を巡って協力すべき相手方に翻弄され，屈服か自立かのジレンマを抱えこまざるをえなくなったのも見逃せない。このようなジレンマは反共的な社会民主主義には存在しえず，それゆえに首尾一貫性が際立つが，グニフケたちのように，反ファシズムの貫徹が民主主義の確立に通じると想定した時，共産党との協力問題を巡り，頭からの拒否ばかりではなく，様々な可能性を模索する立場が存在しても不思議ではなかった。そして組織合同への共産党の姿勢が変化する一方，同党についての見方が変わるのに応じて，譲歩の許容限度が問われ，その度合いに応じて容共的な社会民主主義の立場が分岐していくことになったのであった。既述の通り，ソ連占領地区社会民主党の最初の4人の最高指導者のうち，グローテヴォールは東部ドイツに残って首相まで務めたが，早期に見切りを付けたダーレンドルフは社会主義統一党創設直前に西側に逃亡し，遅れたグニフケは「新しい型の党」への改造途上の1948年にやはり逃亡した。そして残ったフェヒナーは東ドイツ建国後に要職に就いたものの，1953年に逮捕されて失脚した。このような4人の異なる軌跡から浮かび上がるのは，労働者階級の統一を目指す容共的社会民主主義のジレンマであり，このジレンマは解決されないまま容共的社会民主主義自体が押しつぶされて解消されたという事実である。

ところで，本稿ではもっぱらソ連占領地区に視界を限定し，アメリカなどの西側占領地区での動向には論及しなかった。それは，社会主義統一党

が登場したのは前者においてだけであり，後者にはついに現れなかったからである。しかし，そこでも共産党は活動していたし，ヴェニヒゼン会議が西側で開催されたことに見られるように，社会民主党も存在した。そればかりか，二つの労働者政党を統一する動きも現れたのであり，それは，社会主義統一党の幹部会が創設まもない 1946 年 5 月 7 日に西側の社共両党の党員に向けた公開状で合同を呼びかけたことに端を発していた（Ludz/Ludz 1163）。その意味では，問題になるのは，合同の動きが成果を得られず，新党に結実しなかったことであろう。

そうした結果になったことについては，三つの原因があると考えられる（Schwabe（1）97）。

第 1 は，西側占領地区では社会民主党の大多数が合同に否定的だったことである。西側ではソ連占領地区より遅れて同党が出発したが，そのときには東部ドイツの動向が既に知られ，ソ連と共産党が一心同体であることが明らかになっていた。このため，共産党に対する警戒心が広範に共有されたのに加え，反共主義者のシューマッハーの主導権が急速に固まったことも大きく作用した。

第 2 は，東部ドイツ以上に共産党が劣勢だったことである。戦争末期にソ連軍がドイツ本土に侵攻したのに合わせ，モスクワ亡命の共産党幹部がドイツに送り込まれたが，彼らは西側諸国の占領が予定されていた地域には入らなかった。それは，ソ連と共産党にとってはソ連占領下の東部ドイツが主導権を発揮できる重点的な地域とされていたからだった。その意味で，西部ドイツはいわば後回しにされたのであり，その結果，この地域で共産党は社会民主党に挑むには組織が余りにも弱体だった。例えば 1947 年 4 月 20 日にノルトライン＝ヴェストファーレン州やニーダーザクセン州など 3 つの州議会選挙が実施されたが，社会民主党に大差をつけられて共産党が弱小政党の地位に甘んじたのはその結果だったといえるし，東西ドイツの建国以降には西ドイツで一層勢力を減少させていったのである（ルップ 124; Spilker 96）。

第3の原因は，占領権力による支援が得られなかったことである。これまで論じてきたように，東部ドイツではSMADが共産党に指示を与えるとともに便宜を図るなどして優遇し，社共合同に向けても実力を行使して強力に介入した。けれども，西部ドイツでは共産党は占領権力からの支援どころか，冷遇に甘んじなければならなかった。強制合同というときの強制力がソ連から発していたのと対比すれば，西部では合同に要する決定的な力が欠如していたのである。

こうして西側占領地区では社共両党の組織的合同は起こらなかった。それはソ連占領地区に限られた出来事に終わったのである。ところで，これについて用いられる強制合同という表現からは，共産党との合同の時が社会民主党の終焉の時だったかのような印象が生じやすい。けれども，子細に観察するなら，それは事実ではなく，錯覚といわねばならない。なるほど合同に伴って組織としての社会民主党の姿が消えたのは間違いないが，それを社会民主主義者の消滅と同一視するのは適切ではないからである。実際，SMADの圧力があったとしても，党勢で優位にある政党が劣位の政党に一挙に飲み込まれて雲散霧消することは考えにくい。その意味で，社会民主主義者は社会主義統一党で生き続けたというべきであり，抑圧や粛清のために合同時点における社会民主党の多くの党員たちの期待が幻滅に変わり，初期の穏健な路線や対等原則などが否定されて沈黙させられた時，第三帝国期の中断をはさんで長い伝統を誇る東部ドイツの社会民主党は死滅することになったと捉えるべきであろう。

1990年のドイツ統一の際，コール首相率いる西のキリスト教民主同盟は東の組織を組み込み，ゲンシャー外相を擁する自由民主党も東の姉妹政党を吸収した。それに反し，ブラント名誉党首を戴く西の社会民主党は前年にM. メッケルやM. グートツァイトたちを中心にして新設されたばかりの東ドイツ社会民主党（SDP）という小組織を包摂するにとどまったが（Mühlen/Scholer/Stratmann），そうした相違が生じたのは，東部ドイ

ツで社会民主党の伝統が人的にも組織的にも途絶えていたからにほかならない（ノイベルト 79ff.）。しかし近年，ベルリンの壁の開放後に支配の座から転落した社会主義統一党から東ドイツ社会民主党に移ろうとする動きがあった事実が掘り起こされている。この動きは，社会主義統一党の党員による乗っ取りを恐れる東ドイツ社会民主党の指導者によって結果的に封じ込められ，激動期の一つのエピソードとして記憶の片隅に追しやられてきた（Locke）。けれども，社会民主党に親近感を有するグループが社会主義統一党の内部に存在したこと，しかも同党に残留した彼らが今日の左翼党の社会改良主義を担っていることなど考えると，瑣末な事実として片付けるべきではないように思われる。

それはともあれ，社会民主党の壊滅を踏み台にして，共産党系に制圧された社会主義統一党は，鉄の規律を特徴とし，膨大な党員を抱えながらも前衛を自認するマルクス・レーニン主義の幹部政党に変貌した。そして，1952 年にはキリスト教民主同盟などに同党の指導権を承認させ，社会主義的多党制と呼ばれる衛星政党システムを完成して，独裁政党として DDR に君臨するようになる。また他方では，同年に開催された社会主義統一党の第 2 回全国協議会で「DDR に計画的に社会主義の基礎を建設する」ことが決定され，設立当時の穏健路線に終止符を打って社会主義を目指すことが明示された。これ以降，社会主義統一党はスターリン主義的共産党として，大衆的な支持の欠落という設立以来の重大な難点を克服できないまま，独裁政党としての強権を発動することによって上から社会主義建設に乗り出していくことになる。翌 53 年 6 月に建設労働者のストを起爆剤にして発生した大規模な反乱や，その後に膨大な数の市民が「足による投票」で DDR に反旗を翻して西側に逃亡したのは，市民の支持と参加を得ることなく上から推進された社会主義に対する抗議だったといえるのである。

たしかにヒトラーの第三帝国とは違い，社会主義統一党が君臨した DDR は 40 年にわたって存続した。けれども上から構築された社会主義の体制は

遂に国民から広範な支持を獲得することに成功しなかった。ペレストロイカのためにソ連という強力な支柱を失った時，それに依存してきた体制は市民の間から湧き起こった抗議の嵐に耐えられずに瓦解し，支配の座から転落した社会主義統一党からも大量の党員が離散した。ドイツ統一の激動をかろうじて生き延びた同党は民主社会党（PDS）として転身を図り，西ドイツとの格差や東西間の心の壁を土壌にして東ドイツ地域の利害を代弁することに活路を求めねばならなかった（近藤（1）152ff.）。21 世紀に入り，シュレーダー政権下で推進された福祉国家改革を契機にして福祉国家擁護の政党としてのプロフィルを鮮明にし，社会民主党の脱党者たちを糾合して西にも支持を広げる左翼党にもう一度変わるのはその後のことであり（近藤（3）68, 137），2013 年 9 月の連邦議会選挙では緑の党や自由民主党を追い越して第 3 党の地位を確立するとともに，翌 2014 年 12 月には東部ドイツのテューリンゲン州で初めて州首相を輩出し，統一ドイツの政治地図の一角を占めるに至っている。こうして系譜の面では社会主義統一党は今日の左翼党につながっているのである。

## 引用文献

### * 史料一覧

Dok.1. Befehl Nr.2 des Obersten Chefs der Sowjetischen Militärischen Administration, in: Stefan Creuzberger, Die Sowjetische Militäradministration in Deutschland（SMAD）1945-1949, Melle 1991, S.26.

Dok.2. Aufruf des Zentralkomitees der Kommunistischen Partei Deutschlands an das Volk zum Aufbau eines antifaschistisch-demokratischen Deutschlands, in: Armin Friedrich/Thomas Friedrich, hrsg., Politische Parteien und gesellschaftliche Organisationen der sowjetischen Besatzungszone 1945-1949, Berlin 1992, S.8ff.

Dok.3. Notizen Wilhelm Piecks über ein Gespräch mit Stalin am 4.6.1945 in Moskau, in: Dietrich Staritz, Die Gründung der DDR, 3.Aufl., München 1995, S.224ff.

Dok.4. Aufruf des Zentralausschusses der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands zum Aufbau eines antifaschistisch-demokratischen Deutschlands, in: Armin Friedrich/Thomas Friedrich, hrsg., Politische Parteien und gesellschaftliche Organisationen der sowjetischen Besatzungszone 1945-1949, Berlin 1992, S.17ff.

Dok.5. Antifaschistischer demokratischer Block in Marienfelde, in: Siegfried Suckut, Parteien in der SBZ/DDR 1945-1952, Bonn 2000, S.12.

Dok.6. Vereinbarung des Zentralkomitees der Kommunistischen und des Zentralausschusses der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands, in: Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Die Vereinigung von KPD und SPD zur Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands in Bildern und Dokumenten, Berlin 1976, S.120.

Dok.7. Kommunique über die Bildung der Einheitsfront der antifaschistisch-demokratischen Parteien, in: Hermann Weber, hrsg., DDR: Dokumente zur Geschichte der Deutschen Demokratischen Republik 1945-1985, 3.Aufl., München 1987, S.41ff.

Dok.8. Rundschreiben Nr.16 der SPD, Landesverband Thüringen, vom 6.November 1945, in: Historische Kommission beim Vorstand der SPD, Die Zwangsvereinigung und die Folgen, Bonn 1996, S.24f.

Dok.9. Grotewohl, Otto, Rede auf einer SPD-Kundgebung in Berlin am 14.9.1945, in: Johannes Klotz, hrsg., Zwangsvereinigung? Zur Debatte über den Zusammenschluss von SPD und KPD 1946 in Ostdeutschland, Heilbronn 1996, S.104ff.

Dok.10. Schumacher, Kurt, Politische Richtlinien für die SPD in ihrem Verhältnis zu den anderen politischen Faktoren, in: Dieter Dowe/ Kurt Klotzbach, hrsg., Programmatische Dokumente der deutschen Sozialdemokratie, Berlin 1973.

Dok.11. Resolution von SPD und KPD in Torgelow, Mecklenburg vom 24.12.1945, in: Alexander von Plato/ Almut Leh, „Ein unglaublicher Frühling". Erfahrene Geschichte im Nachkriegsdeutschland 1945-1948, Bonn 2011, S.297f.

Dok.12. Notizen eines führenden Sozialdemokraten（Willy Steinkopf）vom 27.1.1946. in: Hermann Weber, hrsg., DDR: Dokumente zur Geschichte der Deutschen Demokratischen Republik 1945-

1985, 3.Aufl., München 1987, S.60f.

Dok.13. Grotewohl, Otto, Rede auf der Sechziger-Konferenz, in: Hermann Weber, hrsg., DDR: Dokumente zur Geschichte der Deutschen Demokratischen Republik 1945-1985, 3.Aufl., München 1987, S.55ff.

Dok.14. Grotewohl, Otto, Im Kampf um die einige deutsche demokratische Republik. Reden und Aufsätze, Bd.1, Berlin 1959. S. 10f.

Dok.15. クルト・シューマッハー「共産主義者との差異」ズザンヌ・ミラー，河野裕康訳『戦後ドイツ社会民主党史』所収，ありえす書房，1987 年，154f.

Dok.16. Erklärung des Zentralausschusses der SPD vom 15.Januar 1946 zur Entschliessung der Sechziger-Konferenz, in: Vorstand der SPD, Vor 40 Jahren. Zur erzwungenen Vereinigung von SPD und KPD in der sowjetisch besetzten Zone 1946, Bonn 1986, S.22.

Dok.17. Dahrendorf, Gustav, Überblick vom Standort eines Sozialdemokraten, in: Ilse Spittmann, hrsg., Die SED in Geschichte und Gegenwart, Köln 1987, S.149ff.

Dok.18. Bericht von Christopher Steel über ein Treffen mit Grotewohl und Dahrendorf am 4.2.1946, in: Rolf Steininger, Deutsche Geschichte seit 1945. Bd.1, Frankfurt a.M. 1996, S.189f.

Dok.19. Beschluss des Zentralausschusses vom 11.Februar 1946 zur Vereinigung von KPD und SPD in der SBZ, in: Vorstand der SPD, Vor 40 Jahren. Zur erzwungenen Vereinigung von SPD und KPD in der sowjetisch besetzten Zone 1946, Bonn 1986, S.23.

Dok.20. Ackermann, Anton, Gibt es einen besonderen deutschen Weg zum Sozialismus?, in: Hermann Weber, hrsg., DDR: Dokumente zur Geschichte der Deutschen Demokratischen Republik 1945-1985, 3.Aufl., München 1987, S.64f.

Dok.21. Forderung nach einer Urabstimmung von der SPD-Ortsgruppe Rostock am 6.1.1946, in: Hermann Wber, DDR. Grundriss der Geschichte 1945-1990, Hannover 1991.

Dok.22. Entschliessung des erweiterten Vorstandes der SPD, Kreis Potsdam, vom 3.2.1996, in: Historische Kommission beim Vorstand der SPD, Die Zwangsvereinigung und die Folgen, Bonn 1996, S.27f.

Dok.23. Informationsbericht der Abteilung Propaganda der Sowjetischen Militäradministration in

Deutschland über die Durchführung des Referendums in den sozialdemokratischen Organisation Berlins am 31.3.1946, in: Hermann-Josef Rupieper, hrsg., Die Zwangsvereinigung von KPD und SPD. Einige ausgewählte Dokumente der SMAD, Halle 1997, S.15ff.

Dok.24. Protokoll des Vereinigungsparteitages der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands（SPD）und der Kommunistischen Partei Deutschlands（KPD）am 21.und 22.April 1946 in der Staatsoper „Admiralpalast“ in Berlin, Berlin 1946.

Dok.25. Grundsätze und Ziele der Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands, in: Armin Friedrich/ Thomas Friedrich, hrsg., Politische Parteien und gesellschaftliche Organisationen der sowjetischen Besatzungszone 1945-1949, Berlin 1992, S.45ff.

Dok.26. Parteistatut der Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands, in: Johannes Klotz, hrsg., Zwangsvereinigung? Zur Debatte über den Zusammenschluss von SPD und KPD 1946 in Ostdeutschland, Heilbronn 1996, S.118f.

Dok.27. Entschliessung der Ersten Parteikonferenz der SED vom 28.1.1949, in: Christoph Klessmann, Die doppelte Staatsgründung, Göttingen 1991, S.498ff.

## * 欧文文献

Backes, Uwe/ Ralf Thomas Baus/ Herfried Münkler, Der Antifaschismus als Staatsdoktorin der DDR, Sankt Augustin 2008.

Bärwald, Helmut, Das Ostbüro der SPD, Krefeld 1991.

Benser, Günter, Zusammenschluss von KPD und SPD 1946. Erklärungsversuche jenseits von Jubel und Verdammnis, Berlin 1995.

Benz, Wolfgang, Auftrag Demokratie, Berlin 2009.

Bessel, Richard, Germany 1945, Cambridge 2009.

Bouvier, Beatrix, Die Zwangsvereinigung von SPD und KPD und die Folgen für die Sozialdemokraten, in: Johannes Klotz., hrsg., Zwangsvereinigung? Zur Debatte über den Zusammenschluss von SPD und KPD 1946 in Ostdeutschland, Heilbronn 1996.

Creuzberger, Stefan, Die Sowjetische Militäradministration in Deutschland（SMAD）1945-1949,

Melle 1991.

Dowe, Dieter/ Kurt Klotzbach, hrsg., Programmatische Dokumente der deutschen Sozialdemokratie, Berlin 1973.

Ehnert, Günter, Die SPD Thüringens im Vorfeld der SED-Gründung, Erfurt 1995.

Filippowych, Dmitri N., Rechtsquellen der SMAD, in: Horst Möller/Alexandr O.Tschubarjan, hrsg., SMAD Handbuch. Die Sowjetische Militäradministration in Deutschland 1945-1949, München 2009.

Fischer, Alexander, Zur Vorgeschichte der DDR, in: Alexander Fischer, hrsg., Die Deutsche Demokratische Republik, Würzburg 1988.

Foitzik（1）, Jan, Der sowjetische Terrorapparat in Deutschland, Berlin 2000.

Foitzik（2）, Jan, Funktionale Aspekte der Organisation und der Tätigkeit der SMAD, in: Horst Möller/Alexandr O.Tschubarjan, hrsg., SMAD Handbuch. Die Sowjetische Militäradministration in Deutschland 1945-1949, München 2009.

Gieseke, Jens/ Hermann Wentker, Die SED – Umrisse eines Forschungsfeldes, in: Jens Gieseke/ Hermann Wentker, hrsg, Geschichte der SED, Berlin 2011.

Grebing, Helga/ Christoph Klessmann/ Klaus Schönhoven/ Hermann Weber, Zur Situation der Sozialdemokratie in der SBZ/DDR 1945-1950, Marburg 1992.

Gries, Rainer/ Silke Satjukow, „Wir sind Helden“. Utopie und Alltag im Sozialismus, Erfurt 2008.

Haritonow, Alexander, Freiwilliger Zwang. Die SMAD und die Verschmelzung von KPD und SPD in Berlin, in: Deutschland Archiv, H.3, 1996.

Heimann, Siegfried（1）, Karl Heinrich und die Berliner SPD, die Sowjetische Militäradministration und die SED, Bonn 2007.

Heimann, Siegfried（2）, Die SPD in Ostberlin 1945-1961, in: Gerd-Rüdiger Stefan u.a., hrsg., Die Parteien und Organisationen der DDR, Berlin 2002.

Herbst, Andreas/ Gerd-Rüdiger Stephan/ Jürgen Winkler, hrsg., Die SED: Geschichte, Organisation, Politik, Berlin 1997.

Jessen, Ralph, Partei, Staat und “Bündnispartner“. Die Herrschaftsmechanismen der SED-Diktatur,

in: Matthias Judt, hrsg., DDR-Geschichte in Dokumenten, Berlin 1998.

Keiderling, Gerhard（1）, „Als Befreier unsere Herzen zerbrachen“. Zu den Übergriffen der Sowjetarmee in Berlin 1945, in: Deutschland Archiv, 28 Jg., H.2, 1995.

Keiderling, Gerhard（2）, Scheinpluralismus und Blockparteien. Die KPD und Gründung der Parteien in Berlin 1945, in: Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte, Jg.45, H.2, 1997.

Klotz, Johannes, Zeittafel, in: Johannes Klotz, hrsg., Zwangsvereinigung? Zur Debatte über den Zusammenschluss von SPD und KPD 1946 in Ostdeutschland, Heilbronn 1996.

Klotzbach, Kurt, Der Weg zur Staatspartei: Programmatik, praktische Politik und Organisation der deutschen Sozialdemokratie 1945 bis 1965, Berlin 1982.

Koch, Manfred, Blockpolitik und Parteiensystem in der SBZ/DDR 1945-1950, in: Aus Politik und Zeitgeschichte, B37/1984.

Koop, Volker, Besetzt. Sowjetische Besatzungspolitik in Deutschland, Berlin 2008.

Kowalczuk, Ilko-Sascha/ Stefan Wolle, Roter Stern über Deutschland, Berlin 2001.

Lemke, Michael（1）, Die Sowjetisierung der SBZ/DDR im ost-westlichen Spannungsfeld, in: Aus Politik und Zeitgeschichte, B6/1997.

Lemke, Michael（2）, Die Sowjetisierung der SBZ/DDR. Ziele, Strukturen, Wirkungen, in: Landesbeauftragter für die Unterlagen des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen DDR in Sachsen-Anhalt, hrsg., 10 Jahre Roter Ochse Halle, Magdeburg 2006.

Leonhard, Wolfgang（1）, Überblick vom Standort eines ehemaligen Kommunisten, in: Ilse Spittmann, hrsg., Die SED in Geschichte und Gegenwart, Köln 1987.

Leonhard, Wolfgang（2）, Das kurze Leben der DDR, Stuttgart 1990.

Locke, Stefan, Wer zu spät kommt, den bestraft die Linkspartei, in:Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 28.9.2014.

Ludz, Peter Christian/ Ursula Ludz, Sozialistische Einheitspartei Deutschlands, in: Bundesministerium für innerdeutsche Beziehungen, hrsg., DDR Handbuch, Bd.2, 3.Aufl., Köln 1985.

Mählert, Ulrich, Kleine Geschichte der DDR, 4.Aufl., München 2004.

Malycha, Andreas（1）, Auf dem Weg zur SED. Die Sozialdemokratie und die Bildung einer Einheitspartei in den Ländern der SBZ, Bonn 1996.

Malycha, Andreas（2）, Sozialdemokraten und die Gründung der SED, in: Hermann-Josef Rupieper/ Rüdiger Fikentscher, hrsg., Zwischen Zwangsvereinigung und unfreiwilligem Zusammenschluss. KPD/SPD in der Provinz Sachsen 1945/46, Halle 1996.

Malycha, Andreas（3）, Parteisäuberungen in der SED, in: Helle Panke e.V., hrsg., Verfemt-verfolgt-verschwiegen, Berlin 2000.

Malycha, Andreas/ Peter Jochen Winters, Die SED: Geschichte einer deutschen Partei, München 2009.

Mühlen, Patrik von zur/ Uli/ Scholer Evelyn Stratmann, Von der SDP zur SPD, Bonn 1994.

Müller, Werner（1）, Sozialdemokratische Partei Deutschlands, in: Martin Broszat/ Hermann Weber, hrsg., SBZ-Handbuch, München 1993.

Müller, Werner（2）, Die Gründung der SED, in: Aus Politik und Zeitgeschichte, B16-17/1996.

Müller, Werner（3）, Die Gründung der SED 1946 – immer noch ein politisches Streitthema, in: Landeszentrale für politische Bildung Mecklenburg-Vorpommern, hrsg., Die Gründung der SED vor 50 Jahren, Schwerin 1996.

Münkler, Herfried, Antifaschismus und antifaschistischer Widerstand als politischer Gründungsmythos der DDR, in: Aus Politik und Zeitgeschichte, B45, 1998.

Naimark, Norman M.（1）, Die Sowjetische Militäradministration in Deutschland, in: Bernd Bonwetsch/ Gennadij Bordjugov/ Norman M.Naimark, hrsg., Sowjetische Politik in der SBZ 1945-1949, Bonn 1998.

Naimark, Norman M.（2）, The Russians in Germany. A History of the Soviet Zone of Occupation 1945-1949, Cambridge 2001.

Plato, Alexander von/ Almut Leh, „Ein unglaublicher Frühling". Erfahrene Geschichte im Nachkriegsdeutschland 1945-1948, Bonn 2011.

Plener, Ulla, „Sozialdemokratismus" - Instrument der SED-Führung im kalten Krieg gegen Teile der Arbeiterbewegung, in: Utopie, H.161, 2004.

Potthoff, Heinrich, Kurt Schumacher – Sozialdemokraten und Kommunisten, in: Dieter Dowe, hrsg., Kurt Schumacher und der „Neubau“ der deutschen Sozialdemokratie nach 1945, Bonn 1996.

Rexin, Manfred（1）, Eine Debatte voller Zorn und Angst, in: Das Parlament vom 8.3.1996.

Rexin, Manfred（2）, Nie wieder gab es eine offene Feldschlacht mit Demokraten, in: Das Parlament vom 18.10.1996.

Rupieper, Hermann-Josef/ Rüdiger Fikentscher, hrsg., Zwischen Zwangsvereinigung und unfreiwilligem Zusammenschluss. KPD/ SPD in der Provinz Sachsen 1945/46, Halle 1996.

Schneider, Michael, hrsg., Nein zu Hitler! Sozialdemokratie und Freie Gewerkschaften in Verfolgung, Widerstand und Exil 1933-1945, Bonn 2012.

Schönhoven, Klaus（1）, Vorwort, in: Historische Kommission beim Parteivorstand der SPD, hrsg., Das Demokratieverständnis bei Sozialdemokraten und Kommunisten, Bonn 1993.

Schönhoven, Klaus（2）, Tolerierung oder Frontalangriff. Die politischen Konzeptionen von SPD und KPD in der Endphase der Weimarer Republik, in: Historische Kommission beim Parteivorstand der SPD, hrsg., Das Demokratieverständnis bei Sozialdemokraten und Kommunisten, Bonn 1993.

Schroeder, Klaus, Der SED-Staat, München 1998.

Schulz, Peter, Druck und Angst waren die entscheidenden Geburtshelfer für die Vereinigung, in: Landeszentrale für politische Bildung Mecklenburg-Vorpommern, hrsg., Die Gründung der SED vor 50 Jahren, Schwerin 1996.

Schwabe, Klaus（1）, Die Zwangsvereinigung von KPD und SPD in Mecklenburg-Vorpommern, Schwerin 1996.

Schwabe, Klaus（2）, Landtagswahl in Mecklenburg-Vorpommern 1946, Schwerin 1996.

Spilker, Dirk, The East German Leadership and the Division of Germany, Oxford 2006.

Staritz, Dietrich（1）, Die Gründung der DDR, 3.Aufl., München 1995.

Staritz, Dietrich（2）, Die SED, Stalin und die Gründung der DDR, in: Aus Politik und Zeitgeschichte, B5, 1991.

Suckut, Siegfried, Parteien in der SBZ/DDR 1945-1952, Bonn 2000.

Thierse, Wolfgang, Täuschung, Zwang, Repression, in: Historische Kommission bei dem Vorstand der SPD, Die Zwangsvereinigung und die Folgen, Bonn 1996.

Tullner, Mathias, Zwischen Demokratie und Diktatur. Die Kommunalwahlen und die Wahlen zum Provinziallandtag in Sachsen-Anhalt im Jahre 1946, Magdeburg 1997.

Uhl, Matthias, Die Teilung Deutschlands, Berlin 2009.

Uhlemann, Manfred, Entstehung der SED in Potsdam, Potsdam 1996.

Vorstand der SPD, Vor 40 Jahren. Zur erzwungenen Vereinigung von SPD und KPD in der sowjetisch besetzten Zone 1946, Bonn 1986.

Walter, Franz, Die SPD. Biographie einer Partei, Reinbek 2009.

Weber, Hermann（1）, Geschichte der SED, in: Ilse Spittmann, hrsg., Die SED in Geschichte und Gegenwart, Köln 1987.

Weber, Hermann（2）, Kleine Geschichte der DDR, 2.Aufl., Köln 1988.

Weber, Hermann（3）, Geschichte der DDR, 3.Aufl., München 1989.

Weber, Hermann（4）, DDR. Grundriss der Geschichte 1945-1990, Hannover 1991.

Weber, Hermann（5）, Herausbildung und Entwicklung des Parteiensystems der SBZ/DDR, in: Aus Politik und Zeitgeschichte, B16-17/1996.

Weber, Hermann（6）, 50 Jahre Zwangsvereinigung der SPD mit der KPD – Widerstand und Verfolgung, in: Friedrich-Ebert-Stiftung, Büro Leipzig, hrsg., Erinnern-Aufarbeiten-Gedenken, Leipzig 1996.

Wehler, Hans-Ulrich, Deutsche Gesellschaftsgeschichte, Bd.5, München 2008.

Werum, Stefan Paul, Freier Deutscher Gewerkschaftsbund, in: Gerd-Rüdiger Stefan u.a., hrsg., Die Parteien und Organisationen der DDR, Berlin 2002.

Wettig, Gerhard, Stalins DDR. Entstehung und Entwicklung der kommunistischen Herrschaft 1945-1953, Erfurt 2012.

Wetzel, Günter, Das Dilemma der SPD nach dem Kriege. Die Vereinigung mit der KPD in der Sowjetischen Besatzungszone, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 26.8.1994.

Wilke, Manfred/ Peter Erler, Grotewohl beschwor eine grosse und gewaltige Zukunft, in: Frankfurter

Allgemeine Zeitung vom 10.5.1995.

Wilke, Manfred/ Klaus Schroeder/ Steffen Alisch, Sozialistische Einheitspartei Deutschlands, in: Rainer Eppelmann u.a., hrsg., Lexikon des DDR-Sozialismus, Bd.2, Paderborn 1997.

Wolle, Stefan, Die SPD in Ostberlin（1946-1961）, in: Materialien der Enquete-Kommission „Aufarbeitung von Geschichte und Folgen der SED-Diktatur in Deutschland“, Bd.II/3, Baden-Baden 1995.

## * 邦文文献

ルート・アンドレーアス＝フリードリヒ，飯吉光夫訳『舞台・ベルリン』朝日新聞社，1988 年。

石川浩『戦後東ドイツ革命の研究』法律文化社，1972 年。

岩田賢司「ソ連のヨーロッパ政策」石井修編『1940 年代ヨーロッパの政治と冷戦』所収，ミネルヴァ書房，1992 年。

上杉重二郎『東ドイツの建設』北海道大学図書刊行会，1978 年。

ハインリヒ・アウグスト・ヴィンクラー，後藤俊明・奥田隆男・中谷毅・野田昌吾訳『自由と統一への長い道　下巻』昭和堂，2008 年。

ヘルマン・ウェーバー，星乃治彦・斉藤哲訳『ドイツ民主共和国史』日本経済評論社，1991 年。

ヘルマン・ヴェントカー，岡田浩平訳『東ドイツ外交史』三元社，2013 年。

近江谷左馬之介『ドイツ革命と統一戦線』社会主義協会出版局，1975 年。

ジョン・L. ガディス，河合秀和・鈴木健人訳『冷戦 その歴史と問題点』彩流社，2007 年。

加藤秀治郎『戦後ドイツの政党制』学陽書房，1985 年。

河崎信樹『アメリカのドイツ政策の史的展開』関西大学出版部，2012 年。

上林貞治郎『ドイツ社会主義の成立過程』ミネルヴァ書房，1969 年。

木戸蓊『激動の東欧史』中公新書，1990 年。

クリストフ・クレスマン，石田勇治・木戸衛一訳『戦後ドイツ史』未来社，1995 年。

アティナ・グロスマン，荻野美穂訳「沈黙という問題―占領軍兵士によるドイツ女性の強姦」

『思想』898 号，1999 年。

ユルゲン・コッカ，松葉正文・山井敏章訳『市民社会と独裁制』岩波書店，2011 年。

リジー・コリンガム，宇丹貴代実・黒輪篤嗣訳『戦争と飢餓』河出書房新社，2012 年。

近藤潤三（1）『統一ドイツの変容』木鐸社，1998 年。

近藤潤三（2）『東ドイツ（DDR）の実像』木鐸社，2010 年。

近藤潤三（3）『ドイツ・デモクラシーの焦点』木鐸社，2011 年。

近藤潤三（4）「ソ連占領期東ドイツの特別収容所に関する一考察」『経済論集』186 号，2011 年。

近藤潤三（5）「ソ連占領期東ドイツのキリスト教民主同盟　自立した政党から衛星政党へ」『社会科学論集』51 号，2013 年。

近藤潤三（6）「ドイツ第三帝国の崩壊と避難民・被追放民問題」『南山大学ヨーロッパ研究センター報』20 号，2014 年。

近藤潤三（7）「東ドイツ・社会主義統一党の成立について―研究史に関する覚書」『ゲシヒテ』8 号，2015 年。

近藤潤三（8）「戦後史のなかの反ファシズムと反共主義―日独比較の視点から」本誌 205 号，近刊。

近藤正基『ドイツ・キリスト教民主同盟の軌跡』ミネルヴァ書房，2013 年。

斉藤哲「ドイツ民主共和国」成瀬治・山田欣吾・木村靖二編『ドイツ史 3』所収，山川出版社，1997 年。

佐々木雄太『国際政治史』名古屋大学出版会，2011 年。

佐瀬昌盛『戦後ドイツ社会民主党史』富士社会教育センター，1975 年。

白川欣哉「ソ連占領地域における戦後賠償（1）（2）」『経済論集』4-5 号，2008 年。

高橋進・平島健司「ドイツ連邦共和国」成瀬治・山田欣吾・木村靖二編『ドイツ史 3』所収，山川出版社，1997 年。

竹内洋（1）『学問の下流化』中央公論新社，2008 年。

竹内洋（2）『革新幻想の戦後史』中央公論新社，2011 年。

辻井喬「解説　暖かい前衛の記録」安藤仁兵衛『戦後日本共産党私記』所収，文春文庫，

1995 年。
筒井洋一「戦後初期のドイツの労働運動―零時の反ファシズム委員会」『国際政治』89 号，1988 年。
マイケル・L. ドックリル / マイケル・F. ホプキンズ，伊藤裕子訳『冷戦　1945-1991』岩波書店，2009 年。
ホルスト・ドゥーンケ，救仁郷繁訳『ドイツ共産党 1933 － 1945 年 下巻』ペリカン社，1975 年。
仲井斌『西ドイツの社会民主主義』岩波新書，1979 年。
中村隆英『昭和史 II』東洋経済新報社，1993 年。
エールハルト・ノイベルト，山木一之訳『われらが革命』彩流社，2010 年。
野田昌吾『ドイツ戦後政治経済秩序の形成』有斐閣，1998 年。
ニーアル・ファーガソン，仙名紀訳『憎悪の世紀 下巻』早川書房，2007 年。
フランソフ・フェイト，熊田亨訳『スターリン時代の東欧』岩波書店，1979 年。
藤村信『ヤルタ　戦後史の起点』岩波書店，1985 年。
エーリヒ・ホーネッカー，安井栄一訳『私の歩んだ道』サイマル出版会，1981 年。
正村公宏『戦後史　上』筑摩書房，1985 年。
松岡完ほか編『冷戦史』同文館出版，2003 年。
エーリヒ･マティアス，安世舟･山田徹訳『なぜヒトラーを阻止できなかったか』岩波書店，1984 年。
水谷三公『丸山真男 ある時代の肖像』ちくま新書，2004 年。
南塚信吾編『ドナウ・ヨーロッパ史』山川出版社，1999 年。
ズザンヌ・ミラー，河野裕康訳『戦後ドイツ社会民主党史』ありえす書房，1987 年。
安野正明『戦後ドイツ社会民主党史研究序説』ミネルヴァ書房，2004 年。
矢田俊隆『ハンガリー・チェコスロヴァキア現代史』山川出版社，1990 年。
八林秀一ほか編『20 世紀ドイツの光と影』芦書房，2005 年。
ウォルター・ラカー，加藤秀治郎ほか訳『ヨーロッパ現代史　第 1 巻』芦書房，1998 年。
ハンス・カール・ルップ，深谷満雄・山本淳訳『現代ドイツ政治史　ドイツ連邦共和国の

成立と発展』彩流社，2002 年。

ペーター・レッシェ / フランツ・ヴァルター，岡田浩平訳『ドイツ社会民主党の戦後史』三元社，1996 年。

ヴォルフガング・レオンハルト，高橋正雄・渡辺文太郎訳『戦慄の共産主義』月刊ペン社，1975 年。

若松新「東ドイツにおける社会主義統一党独裁の成立とその問題点」『早稲田社会科学研究』41 号，1990 年。

渡辺啓貴編『ヨーロッパ国際関係史』有斐閣，2008 年。

SED 中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所，近江谷左馬之介監訳『ドイツ社会主義統一党史』労働大学，1980 年。